

---

# 君と湖で...

大橋結菜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君と湖で…

### 【Nコード】

N7185A

### 【作者名】

大橋結菜

### 【あらすじ】

小さな頃に両親を亡くした15歳の少年、ヘルゼーは普通の少年。ある日ヘルゼーは仕事で裏山へ行くことになった。そこで一人の少女シルフィーと出会う。そして、ひよんな事からシルフィーの旅に同行することになったヘルゼーだったのだが……

## プロローグ

この世界は今から約2000年前。まだ魔法が当たり前のように使われ、現代人にも解けないような計算し尽くされた機械じかけの世界の話。

しかしこの世界は発展しすぎたため領土や権力をめぐっての争いが絶えず、このレスカーナの土地はいまや荒廃しきっていた。

また、戦争による肉親の死、友人との永遠の別れへの悲しみ・憎しみ・うらみから人々の心には悪魔が巣くい生きる活力や精神力をうばわれ人々は疲れはて、生きる気力をも無くしていた。

まさに世界は滅亡へのカウントダウンに入っていたようなものだった。

## 第1話 旅立ちの夜明け（前書き）

1話目から長くなってしまいましたが、やっと始まります。これからよろしくおねがいします！！

## 第1話 旅立ちの夜明け

カトアニア共和国 B 175番地区 南東エリア

一人の少年は今、寂しげな朝を迎える。彼の名前はアトベア・ヘルゼー。真つ白な髪に、今ではめずらしい青く澄んだ大きな瞳。少しそばかすの多い丸みをおびた鼻にはまだ小さな子供の雰囲気が残っている。色は白め。頼りない肩には、まだ昨日着ていた赤いチョッキがそのままたれさがっている。

「ふう……」

一息ついた彼の姿はまさにわんぱく少年といったところか。緑の短パンに、少し大きめのブーツにいた靴。そして青のシャツ。（赤のチョッキはその場に脱ぎ捨てた。）

彼に両親はいない。彼は戦争で親を無くした。つまり“孤児”だ。今の世界には彼のような子供はいくらでもいる。彼のような15、6歳の子供でも遊んでばかりはいられない。一日きっちり働いて、もらえる金額はたったの1・2シヨート（日本円で120円）やつと一日分のパンとバターが買える程だ。朝食を済ませ、彼はやつとある一つの重大な事に気付く。

「え？」

彼は、…今初めて時計を見た。普段の仕事を始める時刻は9：00、そして只今10：30。

「う…嘘だろオオオオ！」

ドタバタと着替え、髪の寝癖も直さず通りへと駆け出した。

「やべえ…そうでなくても、今日は大切な仕事の日なのにっ」

路地裏の一角にある彼の家からメインストリートの仕事場までは約5分。寝坊したのはバレバレだ。

人目も気にせず走り込みセーフ　のはずがない。突然大きな壁…いや、腹に激突する。ハレン・カルブアード監督官の大きく出た

腹だ。

「アトベア・ヘルゼー！」

大声で呼ばれ、彼は更に状況が悪くなった事に気付いた。

「最悪だ！ よりによって監督官にぶつかるなんて…」

「何か言ったかね？ アトベア・ヘルゼー君。」

「いつ…いえ何も。」

彼が硬直しながら答えると

「何も言っていないだと？！！ 1時間35分28秒も遅れておきながら、私に言うことばが何もないと君はいうのかね？！！」(きこえてなかったのかよつ)とかなんとか思いながらもヘルゼーは一応謝った。否。できなかった。

「すいませ…」

「もちろん君の先程の発言も聞こえているがね…」

(いやみなやつ…)

そう思いながらもヘルゼーは自分を作った。

...

「すみません監督官。昨日の無礼をお詫びしようと思い夜遅くまでコレを作っていたもので、ついつい寝坊してしまったのです。」  
そういいながら、ヘルゼーはあるものを取り出した。

ヘルゼーが取り出したモノは監督官が唯一気をよくする品。

郷土料理：アドニクト。肉の一種だが、脂肪分が少ないうまい鴨肉を調理し、包み焼きにしたものだ。

「ほう。」

監督官はゴクリと唾を呑んだ。

特にヘルゼーが作るアドニクトは子供達の中でも群をぬいてうまい。きっとこの辺ではヘルゼーの右に出るものは一人たりともいないだろう。それに今回の出来はヘルゼーの中でもよくできたと思うほうだ。

「ふん、初の遅刻だしな。まあよしとしてやろう。それに今日は客が遅れてる、運がよかったな。そのまま表に出て裏山にある花畑へ行け。手入れをして客を迎えるのだ。」

「はい、わかりました。ありがとうございます。」

そう言い残すと、ヘルゼーは飛び出し、急いで裏山にむかった。

取り残された監督官がむなしく言った。

「このアドニクトを食べれるのもコレが最後かもしれんな…」

## 第1話 旅立ちの夜明け（後書き）

感想・意見などなど頂けると嬉しいです。2話目からはキャラが一人ずつ登場しますのでお楽しみに。



## 第2話 黒衣に身をまとう少女（前書き）

今回はとても長くなってしまいました。更新もおそくてすみません！

## 第2話 黒衣に身をまとう少女

「はあ…はあ…はあ」

息を切らせながらヘルゼーは裏山の急な坂道を登っていた。

「な…んでっ…いつつも　こん　なに　ふうっ急なんだ

！

！…！」

文句を叫び汗だくになりながらなんとか頂上にでた。

「ぜえ…はあ…こんなとこに用のある客って、どんな人なんだろう？」

一面の花畑。ここは、この世界では欠かせない魔法や生活用品で使われる“玉”を作り出す特殊な花が植えてあるところだ。“玉”とは（ぎよく）と呼ばれ、“玉”そのものではあまり使用されず何らかの形に加工されてから皆の手元に届く。みんながみんな、魔力に長けていれば“玉”をいちいち加工するなんて面倒なこととはしない。魔力がありさえすれば“玉”をそのままの形で持たせても変形させて自由自在に使えるからだ。

いや、むしろ加工されたものを使うより“玉”そのままのほうが軽くて持運びに便利だし使用者が思い描き、願ったものになるから別々に分けて使う必要が無く、便利である。しかし“玉”の変形は使用者の魔力を恐ろしく消費するため、特殊な訓練を受け、さらにもともと魔力をためやすい体質でないと扱うことは難しい。だからわざわざ手間をかけて加工するのだが、その“玉”そのものが欲しいというひとはなかなかいないため、ヘルゼーは少し興味があつた。

監督官の言っていたとおり。まだ客は来ていなかった。先にこの花畑の管理人にあいさつをした。

「じーちゃん！こんにちは！オレだよ、ヘルゼーさ！」

血のつながった祖父ではないが、ヘルゼーと管理人は実の親子の様な親しさだった。

「おう、ヘルゼー。よくきたの。あの坂はきつかったろうに。今日

ここに呼んだのはな、ヘルゼーに会いたいと言っている者がおつての。じゃがいくぶん待ち合わせの時間に遅れているようじゃ。すまんが、草むしりでもしてまっとうしてくれんか？」

頼りにされるのは嫌じゃないヘルゼーは素直に

「わかったよ。」

といって草むしりをはじめた。いつのまにか15分以上時間がたっていたらしい。ヘルゼーは1つのことに没頭しやすいタイプなのですっかり花畑の8割を綺麗に片付けてしまった。

「おーい！ヘルゼー！お客さんがいらしたぞ。」

やっと我にかえったヘルゼーが出来るかぎりの大声で返事をした。

「わかったよ、今いく！」

ヘルゼーが戻ってくるまでの間に客人が管理人に一言告げた。

「本当に彼、孤児なんですか？とても見えない……」

確かに孤児というものはたいていすねたり、さみしがりやになったりと、内向的になる者が多いが、ヘルゼーは違った。いつも明るく純粹。素直でおせっかいだった。もちろん弱者を助けるタイプ。小さい子はほっとけない。いつもなにかと面倒をみてしまうため、小さい子達からは厚い信頼を手に入っていた。「あの子は強い子じゃよ。無論、貴女には及ばないけどね。」

「それほどたいしたものでもありませんよ？」

そういう話をしているうちにヘルゼーが近づいてきたため、話は中断された。

一方、ヘルゼーは例のお客さんが気になっただけでしかなかった。

（僕に会いたいなんてどんなひとなんだろう。）

近づくたびにわかってくる客人の外見。

服は黒、ブーツも黒。

肌は色白、女の子だ。髪が……黒？！黒とはめずらしい！魔法の事をあまり知らないヘルゼーでさえ知っている程有名な話だ。

髪の色は黒が一番魔力をためやすいのだ。

魔力に恵まれているんだなあと思いつつ、自分の髪をみて少しが

っかりした。白い髪は一番魔力をためにくいからだ。わかつてはいただけだねえ……。彼女にもう少し歩み寄ってみると瞳の色は紫がかった。きつとこの女の子は魔力をためやすい体質なんだなあ……。なんて思いながら彼女をみていると管理人にどやされた。

「何ぼさつとしとるんじゃ？ 挨拶ぐらいせんかい！」管理人にどやされてよかった。ヘルゼーは我にかえた。

「あつ……。えっと、はじめまして、僕はアドベア・ヘルゼーと申します。」

「はじめまして、私はカトレア・シルフィーと申します。」

そして、ヘルゼーは単刀直入にきいた。

「あのっ！ 僕に用事ってなんですか？」

「玉の採集を手伝ってほしいの。玉は採る人によっても多少の変化があるからね。あなたみたいに純粋な人に採られるのが一番いいのよ。」

果たして僕は純粋なのかはなぞだったが、仕事なのでとりあえず必要事項を尋ねた。

「どんな玉をお探ですか？」

僕らみたいな孤児は何かと位が下にみられてしまいがちだから、初対面の人には特に気を使う。もし、差別的主観のある人だったら僕はきつと簡単に職をなくしたり、その場で投げ飛ばされてしまう。

女だって魔力では絶対に勝てる気がしなかった。そんな予想をよそに彼女はさらつと言った。

「旅の準備でね、私一人ではとうてい集めきれない量でね。色々と必要だから……」

そう言った彼女の横顔は少し悲しげだった。

「いいですよ。どんな玉をお探ですか？」

と悲しげになった顔のことはあえて聞かなかった。誰にだってあることだ。暗い過去なんて。もしかしたらこの子も孤児かもしれない。そしたら深く聞く事は失礼に値する。この世界の常識だ。

「えっと、地図に利用できるもの。それから能力を写し取れるもの。」

あとは魔法へ転用、再構築できるものがいいわ。採り方は知ってるわよね？」

「え？ただ採ればいいだけではないのですか？」

少し驚いた質問だった。が、彼女は僕以上に驚いていた。

「なっ今までそんな採り方をしていたの？よく花が傷まなかったわね。」

そー言うと彼女は彼女の採り方で採りはじめた。

「玉の花は繊細だからまず実を押さえる。そして軽くひねるの。そうすると花の軸を傷めずに、綺麗にとれるわ。」

いつもしている方法だったがあえて言わないでおいた。彼女の気をそこねてはいけない気がしたからだ。そんなこんなで採取しているうちにヘルゼーは思った。旅をしながらでも自然の玉は採れるし各地に玉の名産地は山ほどあるのに。ヘルゼーは話を聞いてみることにした。

「あの…何故ここで全ての玉を集めるのですか？旅に必要な玉は旅の途中で集めれば荷物にもならないのに。」

「この土地ほどいい玉が作れる所は世界中探してもきつと見つからないわ。ここの玉には心がこもっている。特に玉の成長に一番重要な優しさや愛情がね。」

「そうなんですか？」

「見かけでは判断できないからね、コレばかりは。」

そしてヘルゼーは彼女に一番聞きたかったことを聞く事を決意した。先程から彼女は魔法関係の事しか話していない。それも、一般人の常識の範囲を明らかに越えた知識を持っている。そして、ヘルゼーには少しばかりだが心当たりがあった。

「あの…違ったら申し訳ないのですが、もしかして討悪師ではないですか？この旅のための玉の種類にしてもそうと思えない。」

彼女は本当に驚いた顔をしてこちらにふりむいた。

「なっ…何故討悪師を知っているの??！」

「両親がいつも語ってくれました。この戦争が意味の無いものだということ。そして、戦争によってうまれてくる邪悪な感情、悲しみ、憎しみ、恨み。これらの邪悪なる心を完全に浄化することのできる唯一の存在。討悪師。両親は討悪師を尊敬していました。」

「そうだったの。それなら知っていてもおかしくはないわね。その通り、私は討悪師よ。知っている人はおるか今だに尊敬していられた人がいるなんて驚きね。」

彼女は納得したように採取に戻った。そしてヘルゼーは自分でも思ってもよらない言葉を発していた。

「あのっ！！！」

「ん？」

「僕を旅に同行させて頂けませんか??」

「は？」

もちろん当然の言葉だった。そして彼女は急に顔が冷たくなった。

「1つ聞かせてもらうけど、それは単なる憧れ?それとも工場で下働きさせられている現状から逃げたいから?討悪師と知っていてこんなことを言う人を見たのは初めてよ。それに両親から聞いているでしょう?旅の目的とその末路。一緒に居ても何の得にもならないわ。」

末路?そんなの聞いたことが無い。

「違います、僕はただ世界をみてみたい。僕は生まれてから国はおるか、この街からすら出たことが無い。それにあなた方の仕事の事をもっとよく知りたい!」

「ダメね。」

速答だった。答えるまで0.2秒(勘)

「世界をみたいと言ったわよね?」

「はい!」

「あなたのいるこの街が今、一番安全かつ綺麗だわ。この意味はいずれ解ることよ。世界なんて知らなくなっただって生きていける。悪い

ことは言わない、やめておいたほうがいいわ。私と居てもむなしくなるだけよ……」

いつもの温厚なヘルゼーならここで留まっていただろう。でも今日は違った。

「そんなことない！僕はいつか世界に出て本当に人の役に立つ仕事が出来たいとずっと願っていた！お願い！」

そういつた時だった。ヘルゼーが意識する迄もなくたまたま持っていた玉が形を変形させていた。変形した形は剣。まさに今のヘルゼーの勢いを表したような大きな剣だ。鐔の所にしっかりと玉が納まっていた。彼女は信じられないというような顔をして絶句した。

「あ…あなたソレ?!何処で身につけたの?玉を攻撃用の武器に加工するなんて修業しなければ身につけられない高等技術よ?!」

そう言われてはじめてヘルゼーは玉の形が変わっていることに気がついた。

「あつあれえ?!!」

本人が一番驚いていた。そして彼の様子を見て、シルフィーの頭にすごい推測が浮かんできた。(この子もしかして無意識のうちに玉の変形・加工をしたというの?!もしこの推測が本当なら…)そんな彼女をよそに彼は剣を玉に戻そうと必死になっていた。

「こんなの初めてだよ。何で?!戻ってよ!」

「戻さなくていいのよ…。」

彼女は静かに言った。

「え　？」

「戻そうと考えなくていいの、用がすめば結果ができれば、自然と玉にもどるわ。」

そして彼女は言った。

「まさか玉の変形を修業もせずに行なってしまうとはね。正直、驚きよ?いいわ。気が変わった、旅に連れて行ってあげる。あなたには世界をみて現状をみる。学ぶ権利があるみたい。」

「ほ…本当!!?」

「もちろん。玉の採取が終わったらすぐに出発の準備して、みんなにもあいさつしなきゃだしね。！おっと玉はもうほとんど集まったから先に行つて用意していいわ。待ち合わせ場所は中央広場ね。なるべく早くね。」

「はい!!ありがとうございます!!」

「それとその敬語、やめてくれる??変だよ。歳もそんなに変わらないのに。」

「わかつたよ!本当にありがとう!!」

ヘルゼーは勢いよく山を下りていった。上り出見せた顔とはまったく別。まさに生き生きとしていた。

そんなヘルゼーをよそに彼女は暗く、落ち込んだ気持ちでいた。管理人はその意味がよくわかったので、軽く2、3回シルフィーの肩をたたき、一緒にため息をついてやった。シルフィーは管理人の方を向き

「ありがとう」

といった。

そのころ街ではヘルゼーが居なくなるということで大騒ぎだった。この街を出ることが嬉しくてたまらないヘルゼーが子供たちにいふらして廻ったからだ。大人達はみなあまり大きな反応はしなかった。街から一人孤児が居なくなるといふことが皆、さみしくて言葉がでなかったのだらう。そして昼の12時ジャスト、広場から2人は15年暮らしたこの街を出ていった。



## 第2話 黒衣に身をまとう少女（後書き）

第3話目は早めに更新するように努力します。感想など頂けるととても嬉しいです。よろしくお願いします！

### 第3話 「玉」の使い手

街をでたのはたった15分前。そしてヘルゼーはきづかされた。自分が井のなかの蛙だったということに。普通に物語や絵本の中にいるだけだと思い込んでいたいわゆる、魔物とかモンスターと言われるものが目の前にいた。

「ウソオ…」

「あれ、こんなことも知らなかった？」

かなりあつけにとられているヘルゼーに対して落ち着き払ったシルフィーが声をかけた。

「ええ?! 知ってたの?」

「当然。」

冷静に切り返されたのでよけいに驚いた。

「こーんな低級モンスターでビビっちゃダメよ。何のために玉を採取したと思ってるの?」

「えっ?! あれって闘技大会とかお遊戯会で使っただけじゃ…」

「想像力、もしかして0?」

「なっ!!」

「剣、さっきみたいに出してみなよ。」

「どーやって出したっけ。え〜っと。」

「ふ〜〜。」

やれやれという感じでシルフィーがため息をついた。

「んじゃ最初の方は私が敵を倒すから見て覚えてね。言っとくけど街の外じゃこれくらい日常茶飯事になるから。」

ヘルゼーはまたもや、あつけにとられた。ヘルゼーは若いがいつも重労働を強いられていたので力にはそれなりに自身はあつたが、体の甲殻がいかに岩盤のようなモンスターを剣で叩き切れる自信はこれっぽっちもなかった。それよりもヘルゼーよりも腕の細いシル

ファイが恐れもせずにモンスターに立ち向かっていることに驚きを隠せなかった。次の瞬間、シルフィーが叫んだ。

「言っとくけど、回避とか防御ぐらいは自分でしてよね！」

え。マジ?! まあそーだよな…とかなんとか思いながらもヘルゼーは玉を無意識に握っていた。彼女も玉を取り出し、何かを念じるように額に一度あてた。すると、スウツと消えて木でできた中央に玉の入った杖がでてきた。とっさにヘルゼーは叫んだ。

「そんな杖じゃ倒せないって！」

って心配したら

「あんた、バカ? 殴ったり、斬ったりするだけが戦いじゃないですよ。」

と普通ーに言われた。すると彼女は杖を空高く上げ光りの弾を何発か魔物にぶちあてた。魔物消滅までの時間約2秒。あつけない。つかすげえ。

「キミキミ。」

シルフィーが後ろを振り向き、ヘルゼーに言った。

「出来てんじゃん。心がそのまま表れてる。」

え。まただ。無意識のうちに僕は玉を変化させていた。今度はすごいごつつい盾を出していた。怯える心がそのままてみたいで何だか嫌だった。でもシルフィーからでた言葉は意外なものだった。

「盾は盾でも身軽な木製の盾がでてこなくてよかった。ビビっても戦いから逃げるということはあまりしたくないみたいね。」

深層心理を読まれた気がした。そしてシルフィーは言いだした。

「私たちまだお互いの事をよく知らないわね。よしっ!!」

「へ?」

「歩きながら話すわよ!」

「はあ、」

「カトレア・シルフィー（実名）職業：討悪師、年齢16歳。魔力：測定不能…」

「ちっ…ちよつとまったあゝ!!」

「何？」

「何今の何今の？」

「はあ？」

「魔力：測定不能って!!」

「ええ。文字どうりよ。」

「何で測定不能なの?!」

「計測器が壊れるのよ。私が使っと。」

「は……………??？」

ヘルゼーは言葉を失った。計器類は最大5000まで測定出来るようになっていて。普通3000と言ったらすごい魔力だと言われる。(ちなみにヘルゼーは1500。いたってフツー!)。それが計測不能だとオオオオ?信じられるかあ!?そんなヘルゼーをよそにシルフィーは話をすすめる。

「父：カトレア・クロツク、48歳。故人。髪、灰色。職業：玉を使った武器屋。剣道5段。怒ると目の色がかわる。普段の目は青。(怒ると紫)戦争に巻き込まれて死亡。頭はいつも爆発したような寝癖があった。」

「死んじゃったんだ。」

「うん。それからつと、母：カトレア・フロスキー。48歳。故人。職業：魔術家(占い師のようなもの)魔法検定8段。(最高10段)目の色：紫、髪：黒。戦争時前線に召集され、そのまま戦死。まあ、私もあなたと同じ孤児よ。つと、家族のことはこのぐらいにしておいて、ヘルゼー君、キミのことをおしえてね。」

「えつと…」

「ああ、話さなくていいわ。」

「は？」

そういうとシルフィーは玉を取出した。

「まさか…」

「そのまさかよ。玉の性質の一つ見透かす力。アドベア・ヘルゼー、

15歳。あら、1コ下ね。父：アドベア・カイト、30歳。故人。  
職業：ジャーナリスト。戦争に巻き込まれて死亡。母：アドベア・  
クリス。29歳。故人。まだ若かったのに。職業：      ん？見え  
ない。知られたくないのね。目の色、青。髪      秘密の多い母親  
ね。」

シルフィーが一通り見ている間ヘルゼーはあ然とし、言葉一つでな  
かった。

「何でそんなことまでって顔してるわね。」

えー……。何で僕が考えてることまでわかるのさあ。反則だよ！  
とか思ってたならシルフィーが教えてくれた。

「反則も何もないわ。さつき玉を採取したときに言っただじゃない。  
『能力を写し取れるもの』って。あの玉には相手を見透かす能力も  
秘められていてね、修業した人が使えば個人情報なんてカンタンに  
引き出せちゃうって事ね。」

すっかりバレてるし。この人に隠し事やウソは無駄だなあとヘルゼ  
ーは実感した。すると突然ヘルゼーはめまいを感じ、その場に座り  
込んでしまった。

「あ…れ？？立てな……。」

「当然ね。訓練も受けてないシロウトが玉の変形を1日に2回もす  
るなんて、死にたがっているようにしか見えないもの。どこで身に  
つけたのか知らないけど、ちゃんと修業しないと、その内本当に死  
ぬよ？外の世界はキミがいた『夜も安全に眠れる町』とはちがうん  
だから。」

なんかバカにされた気分だ。果てしなくムカついた。

「大丈夫。今はできなくてもいずれ出来るようになる。確実にね。  
心配しなくて平気よ。私も修行中の身だし。あなたの修業に付き合  
えば私も修業になるしね。」

それじゃ、僕は修業の毎日だなとヘルゼーは思った。どうみても、スパルタ教育をしそうな顔をしている。特に最後の笑顔がね……、何とも言えない気分でヘルゼーは聞いていた。すると彼女が突然いった。

「さて、そろそろ寢床の準備をしなきゃ。」

「え?! まだ昼だよ?!」

「バカね、立てなくなるまで魔法使ったら旅はストップ。今日はここまで。それ以上無理矢理歩いて死にたいんなら別だけど。」

「野宿?」

「当然。」

「女の子なの?」

「仕方ないでしょ? 旅してるんだから。」

「襲われたら……」

「襲う気なの?」

「僕じゃなくて……!」

ヘルゼーは顔を真っ赤にしていた。それをよそにシルフィーは笑っていた。くすくすと。

「何が可笑しいの……!」

ヘルゼーが怒ると

「ごめんごめん。大丈夫よ。あなたに襲われるとは思ってないし。魔物でしょう? 平気よ。私の魔力をなめないで!」

そういうと、彼女は玉を手にし、大きな大きな、そうまさに死神が持つてるんじゃないかと言つような鎌を出してみせた。

「すご……! でもでも、寝てるときに玉持つてなくて魔物とかに襲われたら?」

「とんだ心配性ね。みてて。」

そういうと、彼女は玉を持たずに立ち上がり何も無い手から光の弾を何発か打放った。

「ええ?!」

ヘルゼーが驚いているとシルフィーが教えてくれた。

「だいぶ魔力は持っていていかれるけど玉がなくても戦えるの。だから平気！」

ヘルゼーは思った。味方でよかった。敵だったら相手にしたくないランキング、ぶつちぎりでNO.1だ。そしてその日はそこで泊まった。ヘルゼーは座り込んでから、1歩も動けなかった。体が悲鳴をあげているのが一発でわかった。

「くっ……」

そんなヘルゼーなんて全く気にせずにシルフィーは着々と夕飯の準備をしていた。……といっても皿を並べているだけなのだ。

「ねえ。」

「うん？」

「何か作んないの？」

「作るよ？」

「どーやって？」

「こーやって……！」

ポムっ！軽快な爆発音が目の前でして、もくもくと煙につつまれた。もしかしてまた魔物？！一瞬の不安とともにヘルゼーは叫んだ。

「シルフィー？！シルフィー？！大丈夫かあ？！」

するとトンでもない返事が返ってきた。

「何が？」

えー……。本日2度目の超ビックリ発言。心配して損したかもしれ……した！目の前の煙が晴れてニコニコ顔のシルフィーが現われた。同時に、すごい料理。超豪華フルコースと言った感じだ。「こっ……コレって。」

「魔法よ。ちゃちゃつとね。今日は旅の初日だからちよと豪華ね。」  
いつのまにか夕暮れ時。辺りは暗くなり始めていた。

「電気つけなきゃだね。」

「何言ってるんのヘルゼー。」

「え？」

「ここは森よ？電気なんてないわ。」

あ、そつか。水も電気もないんだ。

「夜とかどうすんの？」

「コレ。」

と言いながらシルフィーはランプを取出した。中には小さな玉が入っている。

「よっ。」

人差し指で玉を指すと玉が炎のようにゆらめき、輝きだした。でも、どうみても小さい。手のひらサイズだ。

「それと…ホイッ」

ランプを指さすと、ランプが大きく大きく大…ってでかすぎだろコレ…！

「ちよちよっ！」

「ん？」

「『ん？』じゃなくて！デカイ…！」

「ああ、キャンプファイヤーみたいに暖まるにはこれぐら大きくないとね。」

本当にキャンプファイヤーするときのくんである木みたいな大きさだ。

「そつか、暖もとらなきゃなんだ。」

「そーゆーこと！」

「あつたけ〜！」

「今は動けないだろうからもう少しそこに居てね。」

「どこいくの？」

「お風呂。」

「はあ？！ここ森のなかだよ？！」

「鈍いなあ……。」

「あ！！玉ね。」

「そーゆーこと、ちなみに、のぞいたら地獄が見えるから。（にっこりと妖笑）」

「のぞかないよっ！！ってか動けないし…！」



「そ〜だったね。」

なんて今知ったみたいない言い方しやがって…。たまにシルフィーってイラっとくるな…。

「冗談なんだからそんなに怒らないですよ？」

なんて言いやがった。

「ってかキヤラ変わりすぎ！」

誰がキヤラ変わるほど怒らせたとってんだー！ー！ー！ー！心臓の底からさけびたかった。そんなことを思っていたらいつのまにかシルフィーは居なくなっていて少し離れたところで入浴しているみたいだった。ヘルゼーはフルコースを目の前にして、限界だった。ヘルゼーは少しだけ体が動いたので1番近くにあったフルーツにかぶりついた。

「うんめえ〜〜〜！！！」

でもこれ以上は動けないのであとのご馳走はシルフィーが来るのを待つしかなさそうだった。手に取れるだけのフルーツを取って、元の位置に戻りフルーツを堪能したが、5分でなくなった。

「腹減ったなあ〜。」

情けない声で呟いていると何処からともなくでっかいピコピコハンマーで殴られた。ピコっという良い音がした。以外と痛かった。

「いつてっ！ー！」

「先に手をつけた罰ね。」

バレたか……。シルフィーは新しい洋服になっていた。

「パジャマ？」

「そーだよ？」

「どーりで。」

「何が？」

「色。」

「は？！」

「普段は黒じゃん？」

「ああ、白だから？」

「そーゆーこと。」

シルフィーはラフな格好だったが白の洋服に黒の髪がよく映えていた。

「いつのまにか口癖うつってるし。」

「あ……。」

「まいっか、んじゃ夕食にしよう。」

「待ってました!」

「いただきます!」

「いただいてます!」

「何ソレ!」

シルフィーはツボに入ったらしく大笑いしていた。

「だって、先に食べちゃってたから……。」

「はははっ!そーだね。間違ってないよ君。」

なんてたわいもない話をしながらの久しぶりに楽しい夕食になった。だが1つおかしい事といえば、ヘルゼーの異常な食欲だった。1人で5人前は食べている。

「普段こんなに食べたことないよ。こんなにお腹すいたこともないし。」

「魔法は恐ろしく体力を使うからね、たくさん食べないと持たないよ?」

「うん。実感したよ。」

夕食をすませるとヘルゼーは少し動けるようになっていた。

「おっ。立てる!」

「無理しちゃダメだよ。そのまま行ってお風呂入っておいでよ。服も用意しておいたから。気に入らなかつたら魔法で好きなのに替えてあげるから安心して。」

「あっありがとね。」

ってドラム缶かいっ!なんてベタな。まあ仕方ないか……。でも、これにシルフィーも使ったんだよね……。ちょっと気まずい。まっいか!熱すぎるかと思ったら以外に適温。あつたけ……。何か

色々あつて今日は疲れたな、早くあがつて寝ちやおう。

ザバツと音をたててあがつた割りにはシルフィーは気付いてなかった。シルフィーは地図用の玉を眺めていた。その玉には、世界地図が映し出されていたがいくつか、赤い矢印が点滅していた。もつとよくみてみたいと思い、シルフィーに気付かれないようにそつと近づいたがヘルゼーが見える位置になる前にシルフィーが気付き声をかけられてしまった。

「ヘルゼー、出たんなら早く言つてよ！！あなたは今一刻も早く体を休めなきゃならない時なんだから。」

「あつごめん……。」

「謝る所じゃないけど、まあいいや。さあ。」

そう言つと、シルフィーお得意の魔法でカントンにベットが出てきた。

「おやすみ。」

「おやすみ……。」

シルフィーは少しうわの空だったが特に気にしなかった。なにより疲れて眠すぎた。目を閉じた瞬間、意識が吹っ飛んだ。

#### 第4話 危険な日食に襲われる村 前編（前書き）

更新が遅くなつてしまい申し訳ありませんでした！毎回読んでくださっている方々、本当にすみません！それから嬉しい事に読者数が100人を突破いたしました！本当なら突破記念もしたいし、毎日更新したいのですが何分作者に時間が無いのでお許しください！出来る限り書いていこうと思いますのでこれからもよろしく願います。

#### 第4話 危険な日食に襲われる村 前編

朝、目覚めるとシルフィーはもう起きていた。体は充分動かし、気分爽快とはまさにこのことをいうのだろうと言っぐらいすっきりとした目覚めだ。

「んんんんん！」

軽く伸びるとシルフィーが気付いた。

「おはようヘルゼー。よくねれた？」

「うん！バツチリだよ！」

「それはよかった。んじゃ！今日からの旅は修業しながらの長～～い旅になるわね！フフフ」

最後の笑いはやめてくれ。本気で恐いから。昨日あれだけの魔法の数々と魔力を見せ付けられたら誰でもこうなるだろう、と言っぐらい本当にすごかった。あんな魔法ショーを間近でみたのは初めてだった。でも気合いは充分。

「よろしくお願いしや～す。」

「お！～やる気あんじゃん！」

「とりあえず生きていくにはコレしかナイだろ？」

「そーゆーこと。」

つー訳で歩き始めたんだけど、修業って何すんだろ。昨日の1日でシルフィーが見かけほどか弱くないって言うことと、多少恐いっていうか、100%逆らえないって言うことと、スパルタ教育だなんて言うことだけはよく分かった。

「ふん、私のことそーゆーことだけ分かったんだ～。」

しってしまった！玉の存在を忘れてた！！

「話し掛けてんのにな～んも反応しないから、何考えてんのかと思えばそーゆーコトなんだ。じゃあ、お望み通りスパルタ教育で修業を開始させていただきますね！」

「はっはっはいい。」

人生最大の過失だ……。ヘルゼーはそう悟った。

「まず玉を持つて。」

「はい。」

「よし。じゃあ形状変化！」

「は？」

「『は？』じゃなくて、昨日みたいに。剣とか盾とかなんでもいいから。まず第一の修業は玉の形状変化に耐えられるくらいの魔力と体力をつけること。はい！始め！！」

「『始め！！』って言われたってどうやったかなんて覚えてな……」

「昨日の私の助言、まさかとは思っけど忘れたとか言わないよね？」

「忘れました。なんていえねー！！！！ヤバーーーーーイ！

！どーしよーコレ？！

「えっ……と確か……」

「考える！！考えるんだヘルゼー！確か思いとか言ってたはずだ！！

「思うこと？」

「違う。でも惜しい！」

「えっと……！そーだ！心に欲しい物とか願いとかを浮かべる！」

「正解。じゃあ最初はできそうな剣から。」

「よしし！」

剣をイメージして創る。すると、ぐにや。すっごい変な感じだけど玉に力を吸われ、玉が剣に変化した。

「上出来。じゃあなんでもいいから次の村に着くまでの間、1日に何個だせるかとか、期限をきめてできるだけ多くだせるようにチャレンジすること。」

「イエッサ。」

ヘルゼーは次から次へとチャレンジしてみた。剣 ムチ 大剣 弓  
ハンマー 銃。6品目でヘルゼーが限界を訴えた。

「も……う……ムリ……！！」

するとシルフィーは冷たく言い放った。

「甘い。」

鬼だ。鬼がここにいるよー！ー！！！！

「まあ、しょーがないか。白い髪でここまでできれば充分ね。」

「ふう。」

胸を撫で下ろした次の瞬間だった。

「10分たったら行くから。」

えー、昨日は泊まってくれたのにー。って言うような顔をしていたら、

「いつまでも止まってるられないでしょ。旅の途中なんだから。それに、1度泊まった周辺に長居するのはよくないわ、魔物に襲われる確率も高くなるしね。」

「あ、そっか…。」

「わかればよろしい。さっ行くわよ。」

「もう……??」

「只今10分1・2・3…」

「あゝもうわかったよ！行くよ！」

ヘルゼーは半分自棄になりながら答えた。それから歩きながら魔力を回復して、できそうになったら1品だしてみると言った具合で進んでいった。そしてヘルゼーが15品目をだしたときだった。急に緑のトンネルが開けて明るくなった。

「着いたわ。清らかな水で名高いシラティスの村よ。」

「もう着いたの?!」

「休んでから2時間以上は歩いてたわ。着いて当然よ。」

そんなに経っていたのか。ヘルゼーは全く気付かなかった。つていうか、僕達がいた街よりもはるかに……規模小っさ！入ったと思ったらもう村の出口が見えてるし……。

「小さいとか、言っちゃダメよ。私たちのいた街が大きすぎたんだから。」

「ここもカトアニア共和国の中の村なの？」

「そうよ、まだ国もでてないわ。隣村に來ただけだもの。」

「国って地図でみると小っちゃいけど実際は広いんだね。」

ヘルゼーが改めて実感したように言っとシルフィーは呆れた眼差しを向けて言い放った。

「あんた、本当に何にも知らないのね。それでよく今まで恥をかかなかったこと。」

ひどい毒舌だ。人生丸ごと馬鹿にされた気分だ。するとシルフィーは村に異変が起きていることに気が付いた。

「！待って！」

ヘルゼーが足を踏み入れる1歩前だった。

「何？」

「この村、様子が変わったわ。」

「はあ……？別にどこも変わってなんかいないと思うけど……。」

「急によ、昼なのに暗くなり始めてる……。」

ヘルゼーが辺りを見回すと、今来たばかりの森は明るく、村の出口も明るい。ただ目の前にある村だけが夜のように暗い。ヘルゼーが空を見上げた。するとヘルゼーの瞳に信じられない光景が目映った。闇だ。一面の悪雲が空を覆っている。

「シルフィー！！アレだよ！！」

ヘルゼーは悪雲を指差し叫んだ。シルフィーも空をみた。そしてシルフィーからは思ってもみない言葉が飛び出た。

「あー！！日っ……食？何故？！今年は起きないはず……！！」

「えっ！シルフィー！見えないの？！」

「何が？日食なら見えてるわよ？」

おかしいなと思うもう一度空を見上げると、もうそこに悪雲は無くシルフィーの言うように闇に喰われている太陽が目に入った。

「あ……れ？」

「どうしたの？ヘルゼー。」

見間違いだったのかなあ……、魔力をつかいすぎて幻覚をみて錯覚したのかも知れないと思い、誤魔化した。

「なんでもないよ。ただ魔力をつかいすぎたみたい。」

「まあ、村についたし、今日は休めるだろうから。とりあえず事情



を聞かなきゃ。」

「日食か。旅の方、日食がめずらしいですか？」

シルフィーが話した瞬間に声をかけられたので驚いた。後ろを振り向くと、畑仕事を終えたばかりのような鍬を持った中年のおじさんが立っていた。そして、すぐさまシルフィーが対応する。

「ええ、実際に見るのは初めてですし。」

するとそのおじさんはとんでもないことを言いだした。

「この村ではかれこれ、300年ほど前からほぼ毎日のように日食が起きています。今となつてはもう日常の風景の一部です。」

シルフィーが柄にもなく焦っているのがわかった。

「一番この現象について、詳しいのはあなたですか？」

旅の基本、最初に話した人から情報を聞き出す。

「はい。村長ですから。」

自慢かよつ！とツツコミを入れたくなるがガマンガマン…。

「ではお話いたしましょう、討悪師様。」

「……はい。お願いします。」

あれ？討悪師って確か知らない人のほうが多いってシルフィーが言っただけじゃなかったっけ？

「村人で老人に近いおじさんよ？古い習慣の強い所ほど知ってる人は多いわ。」

小声でシルフィーが教えてくれた。おじさんに聞かれていたら大変だもんな。

そして、村長の家に案内された。

「どうぞ。何もありませんが…。」

「ありがとうございます。」

席に着いた途端、シルフィーが切り出した。

「単刀直入に聞かしていただきます。こんなに頻繁に日食が起きているのは何故ですか？それに日食が起きているのに何故平気で外を歩けるのですか？日食が異常な回数起きているということは、闇に

村が喰われている証拠だというのに……。」

「あれ?! 日食って自然現象じゃないの?」

「普通に起きている分には全く問題無いわ。でもこの村のように通常ではありえない回数の日食が起きている場合は、闇に吞まれている証拠なのよ。誰の心にも悪魔がいるのは知っているでしょう?」

「うん。」

すると村長が話し始めた。

「光の玉です。光の玉を身につけていれば心が闇に汚されず、魔物になる心配もない。」

「え? 魔物って元人間なの?!」

「呆れた。本当に何も知らないのね。まあ学んでいなければ仕方ないか。その通り、魔物は元人間よ。今度詳しく教えてあげるから今は黙ってて。人の命にかかわるかもしれない話だから。」

そんな重大な話になるのか……、っていつても誰の命だろう。多分村人だよ……。会話的に。シルフィーが村にきてから焦っている理由もそのせいだろう。

「でも、よく発見されましたね…。光の玉なんて。解決策なんてなかなか見つかるようなものじゃあないのに……。」

「村の伝説のようなものなのですが、今から280年前に、そう日食に襲われるようになったころの話です。村を捨てて逃げるか、『使命』をまっとうするために残るかで村人意見は真っ二つに割れたそうです。日食のせいで皆の心は揺れに揺れ、苦悩していたその時でした。一人の討悪師様が現われたのです。名をカトレア・ハウゼット。闇の呪いの強いこの村を浄化し、一時的ではありましたが光の保護魔法をかけてこの村を去ったそうです。」

使命……。何のことだかさっぱりわからなかった。

「ところが、最近困ったことが起きているのです討悪師様。」

「なんですか? 光の玉を持っているなら、闇の心配はいらないはずですよ?」

「ええ、1人を除いては。」

「どういう意味ですか？」

「村に1人だけ不幸にも日食の時に産まれた娘がいます。その娘だけが呪いが強く、光の玉を持っていても日食の時は外にはだせません。」

「どんな子なのですか？」

「とても元気で明るく優しい子です。会ってみますか？」

「はい。お願いします。」

「わかりました。では、参りましょう。」

村長の家をでて、真つすぐ前に50歩ほど進んで、着いた。おむかいなら紛らわしいことしないでよ！表札がでていた。木製のため少し読みづらいが、

ミケ・ガステス

セ

ウス

ライティア

と書かれていた。家は留守だったので畑にいくとミケ氏と思われる人物が働いていた。

「ミケさ～～～～ん！！あんたに朗報だぞ～～！！娘さんのけんだあよ～～！！」

村長元氣だな。

「わかりました～～！今そちらにうかがいます！」

ミケ氏の方が若いはずなのに声が小さく聞こえる……。コレが村長パワーか……。そんな馬鹿なことを考えながらミケ夫婦がくるのを待つ。

「お待たせいたしました。私がミケ・ガステスです。こっちは妻のセウスです。」

「よろしく願います。娘を助けてやってください。」

「まずお伺いさせていただきますが娘さんが日食の被害者なのですね？」

「……。はい……。」

ミケ氏が応対した。

「娘をどうにかしてやれませんか？元氣なのに、1日の半分は外に

でれないなんて。まだ13なのに。」

奥さんが話した。

「遊びたい盛りで最近をよく家を抜け出すようになってしまい困ってるんです。あの子が日食の時に家を抜け出したりでもしたらと思うと……。」

ミケ氏の発言にシルフィーが食い付いた。

「それは危険ですね。ところで娘さんは闇が深くなると何に化けるのですか？」

「闇の化身とでも言いましょうか……。三面犬ケルベロスですよ。」

すると奥さんが付け足すように言った。

「黒豹になるときもあります。」

するとシルフィーは驚いたらしく目を見開いて言った。

「固定していないのですか？」

「いいえ。よくわからないのです。最初は日食も気にせず外に出していたんです。呪いを知らなかった頃は、光の玉を持たせれば大丈夫だと聞いていたので。そうしたらずっと三面犬のミニ版になっていたのです。私たちは畑仕事で目を離していて気付いた頃には私たちが獲物のように狙う目でした。それから外出禁止にして。でも運悪く抜け出したのが日食の日に1度当たってしまった。その時が黒豹だったのです。」

少し間をあけてからシルフィーが言った。

「もしかしたら、成長と供に変化がおきたかもしれませんね。娘さんは？」

「もちろん家の中に……。」

話していた奥さんの顔色が急に変わった。

「な……で……??！」

そういつて奥さんは気を失った。嫌な予感は的中するもの。三面犬になった娘が後ろにいた。

「三面犬だったか……。お願いします。できるだけダメージは少なく……！」

父親が叫んだ。

「わかっていきます！ですが多少はガマンを……。」

「妻を家に入れてきます！」

「お願いします！」

「シルフィーどーするの？光の弾じゃ強すぎるよ？！」

「分かってるわよ……だつたらこうするまでよー！」

そうするとシルフィーはまた杖をだし、天高くあげた。光の弾……とおもったら杖についている玉からものすごく眩しい光があふれ出た。

「うわ……まぶし……。」

まばゆく光ったあとはスウツとうすれた。

「眩しいだけで聞くの？」

目をチカチカさせながらヘルゼーが言った。

「この種の魔物は気を失う事が多いわ。そうすると……。」

やつとのことで目を開けたヘルゼーが見たものは三面犬ではなく美しい村娘が1人倒れていた。

#### 第4話 危険な日食に襲われる村 前編（後書き）

意見・感想・批評、いただければ幸いです。作者の成長の為なので  
厳しい意見もありがたいです！よろしくお願いします。

大橋結菜

## 第5話 危険な日食に襲われる村 後編（前書き）

ついに、日食村編の完結です！いや、ここまでくるのに思った以上に時間がかかってしまい申し訳ありませんでした！読んでくださっている方、（居てくださいると良いな……）こんな作者ですがこれからもよろしくおねがいします！

## 第5話 危険な日食に襲われる村 後編

シルフィーは頼みごとでもなんでも突然言ってくる。今回も例外ではない。

「ヘルゼー、体力には自身あったわよね？」

「え……？」

「分かってるわね？」

「はい……わがつでまずども……。」

ヘルゼーはしぶしぶ娘を家のなかに運んだ。娘が予想以上に軽かったのがせめてもの救いだった。ミケ氏と一緒にベットに寝かせて家にあがった。

「娘は?!」

心配で心配でどうしようもないようだった。

「大丈夫。落ち着いてください。気を失っているだけです。が、このままではいけませんね。生身の人間が体を変形させるということは体への負担が半端じゃないですから。それに意志に反しての闇の化身への変身ですから、より魔物に近くなってしまう……。」

「どうにかありませんか？討悪師様。」

シルフィーは少し考えてから言葉を紡いだ。

それにシルフィーには気掛かりなことがいくつあったので思い切って聞いてみることにした。

「あの……、二つお聞きしたいことがあるのですがよろしいでしょうか？」

「もちろんですとも。なんなりとお申し付けください。」

「村の方はみんな討悪師の存在を知っているのですか？それと、なぜこんな危険な日食に襲われてまでこの村におられるのですか？」

「村長から聞かれたと思います。が使命をはたそうという意欲のあるものだけが残りしました。その使命とは討悪師様が危険な旅をしてまで追い求める、村の秘宝。『聖玉』を守るためです。その事を当時



の村長が村人に話したので討悪師の存在も、『聖玉』の存在も知っているのです。」

シルフィーはうつすらと目に涙を浮かべていた。

「すべて承知のうえで、私達……旅する討悪師の為に……闇に沈むかもしれない茨の道を選んだというのですか?!」

シルフィーの目から大粒の涙があふれ頬を伝って床に落ちた。美しい涙だった。悲しみではなく、感謝の涙だった。

「そうです。すべては討悪師様の為、世界の為。討悪師様がこの逆境の中つらい旅をしてくるのに私達だけあきらめて逃げるわけにはいかなかった。」

シルフィーは心から感謝の意を表し、深々と礼をした。

「必ず、娘さんは何が何でも治してみせます。村の方々の決意、無駄にしないためにも。もし、儀式で浄化しきれなければ旅に同行してもらうことになるかも知れませんがよろしいでしょうか?」

「そんなに強力な呪いなんですか?この村での儀式だけでは治らないのですか?」

「満月の夜。つまり今夜試しては見ますが何とも言えません。」

「そう……ですか……。」

「まあ、まずは今夜です。ですからあまり気をおとさずに……。」

「はい、わかりました。妻の様子を見て参りますので失礼します。」

「はい。」

シルフィーは軽く会釈した。

そしてヘルゼーの頭に1つの疑問が浮かんだ。

儀式って何?

僕って本当に無知だ……。実感しながら恐る恐るシルフィーに聞いた。すると……あ、やっぱり……。

「浄化の儀式も知らないの?それでよくついてこようなんて思ってたわね。浄化の儀式っていうのは、満月の夜に討悪師が湖の上とか、泉とか、神聖な場所で行なう儀式の事よ。あなたも知ってる様に討

悪師には邪を払う事が出来るでしょう？だからその儀式で彼女の邪を払ってみるのよ。」

ふうん。でも湖の上とか、泉の上とかって立てるのかな？水の上だけど……、まあシルフィーの事だから魔法でチャチャッと出来ちゃうんだろうな……。羨ましい限りだ。

「まあ普通は多少の邪気なら夜じゃなくて昼でも神聖な場所じゃなくても出来るんだけどね。闇の使者になるくらいだから相当闇が濃いと思うの。だから、略式じゃなくて正式な方法でやってみるけど。それでも例外的にダメな時があるのよね。その時はすべてを浄化する旅の最後に完全浄化っていう形になるかもね。」

なる程なる程。旅の目的ぐらいヘルゼーだって知ってる。でもなんで最後なんだろう？ヘルゼーの中にたくさん疑問が浮かんできたが、聞くのはやめた。否、出来なかった。シルフィーはすでに精神統一の為に一人になるといつてどこかへ行ってしまったため聞けなくなった。とりあえずヘルゼーは森に入ってすぐにある、切り株に腰掛け、休み休みだが玉の変形の修業を続けていた。

一方、シルフィーは湖を眺めながらヘルゼーの事を考えていた。

この世界では色が濃い程魔力をためやすい。

髪でも瞳でも。

明らかにヘルゼーは矛盾している。

髪が白で瞳は青？何か変だ。

髪は一番魔力をためにくい体質を表す白い色をしているのに瞳は青なんて。

青は紫の次に魔力をためやすい色なのだ。

誰がどう見ても矛盾している。

それに母親のことも。

玉で見て母親の情報が見えないなんて経験は初めてだ。ヘルゼーの手前、よくある事のように振る舞ったが実はめずらしいケースなの

だ。玉で見えない情報、体に矛盾点。なにかある。シルフィーはヘルゼーにたいして興味がわいた。こんなに色々特殊な人間を相手にするのは初めてだ。精神統一のはずが色々気になりだして、全く集中出来なかった。

そして時は流れて夜。満月が綺麗に輝いていて、まるで漆黒の闇の海を照らす、灯台のようだった。シルフィーはミケ氏とその娘ライティアを連れて湖のほとりにいた。ヘルゼーも修業を中断し、立ち合った。シルフィーが最初に湖の上に立ち、ライティアを手刀で気絶させた。が、ライティアは倒れる事無く、静かに湖の上で横になったかと思いきや、フワフワと軽く50センチぐらい浮いていた。「すっげえ……。」

あんたも浮いてみる？とか言われそうだから小さく呟いて終わりにした。でもそんなコト言ってる時じゃあないなっていうのが明らかに伝わってきた。シルフィーの様子が変だ。柄にもなく緊張してるようだったし、とにかく普通じゃなかった。何が始まるんだろう……。するとシルフィーは湖の上に立ち、村人に深々と礼をし、玉を杖に変えた。そして、自分の涙を玉に一滴たらしした。すると、シルフィーが水の大きな球体に包まれた。呼吸は大丈夫なのか心配だが、シルフィーはにっこりと微笑んでいるので大丈夫だろう。

途中村人の話を盗み聞きたが、どうやら例の『聖玉』とやらに自分の実力を認めさせるとかなんとか。儀式自体よく飲み込めていないヘルゼーにはさっぱり何が何だか分からなかった。

と、考え事をしているうちに儀式は進んだらしい。

第2段階へ移行したようだ。

湖の上で水に包まれて立っていた（浮かんでいた？）シルフィーが、そのまま湖の中に入っていった。

儀式の途中なのがいいのか？そう思ったとたんシルフィーがあがってきた。村人達はびっくりして、みんな息を吞んでいた。シルフィ

ーの手には綺麗に水色に輝く大きめの玉があった。あれが……聖玉？　なんか、シルフィーが聖玉を持って来て以来、空気が変わった気がした。なんかビリビリする感じた。しかもなんとなくひんやりとした感じの空気。

そして儀式は最終段階になったようだ。シルフィーが聖玉を持ちライティアのそばに立った。そして持っていた杖の中に埋め込まれていた玉と聖玉を交換し、昼間ライティアにやった様に光を出した。だが昼間とは違いただ眩しいだけじゃなく青く清らかなとてもとても綺麗な光だった。ライティアの体から邪が抜けていくのが見えた。黒いモヤが見えた。

幻想的な光景だった

そしてシルフィーはミケ氏と村長に二言三言会話を交わし、そのまま地面に崩れ落ちるように倒れた。魔力を使いすぎたのかなあ……？　でも計測器でも計りきれないシルフィーの魔力を使い果たすような魔法があるのだろうか？

とりあえず詮索は後にして、ヘルゼーはシルフィーを引き取り、（抱えて）ミケ氏の部屋を貸してもらい寝かせた。シルフィーが回復するまで旅は中断ということになるだろう。。。。もう、夜も更けていたのでヘルゼーも眠ることにした。

翌朝

ヘルゼーが目覚めるとシルフィーはまだ眠っていた。やはり魔力回復には時間が掛かるらしい。そっとおいた方がいいと思い、ミケ氏にシルフィーを頼み昨日の湖へ向かった。

湖はいたって普通。

ときどき吹く風に、水面を揺らすことはあるけれど得に変わった点はない。じゃあ昨日シルフィーが湖の中に入れたんだから、と思い潜ってみた。しかし何回潜つても途中までいくと壁のようななにかに阻まれて進むことが出来なかった。シルフィーは湖底に何を見たのか確かめたかったが、引き上げるより他になかった。

しかたなく、他にやることもないので、シルフィーの様子を見に一度戻ることにした。すると大声で僕の名前を呼び続けている人が居る。あんま呼ばれると恥ずかしいんだけどなあ……。ってミケさんじゃん！なんかあったのか？ヘルゼーはミケ氏のもとに駆け寄った。

「何かありました？！」

「おお、ヘルゼー君。やっときたか。シルフィーさんとうちのライディアの意識が戻ったぞ！！」

「本当ですか？！」

「ああ！会つてくるといい！」

「ありがとうございます！」

ヘルゼーはミケ氏の家に入り階段を駆け上がった。扉を開けると、起き上がっておかゆを食べているシルフィーがいた。

「シルフィー！」

「ああ、おはようヘルゼー。」「もう大丈夫なの？」

「ええ。魔力を使いすぎただけだから。心配した？」

するとヘルゼーは絶対悪いことを思いついたと分かる不適な笑みを浮かべた。それはもう背筋が凍るぐらいの。

「なっ！何よ！その顔は！何が目的？！」

「フフフ……シルフィーには心配かけさせた責任を取って頂きます！」

「何しろつていうのよ？！」

シルフィーが不安そうな顔をする。

「大丈夫大丈夫！そんなたいしたことじゃないから！」「なによう……。」

「魔法&聖玉&儀式のこと詳しく教えて！」

「つまり、魔法関係の講義をしると？」

「流石！よくわかってるうー！！」

「はあ……私はなんて弟子を取ってしまったんだろう……。」

「ねえねえ、いいよね？シルフィー？」

まるでわんぱく5歳児の子供のような顔つきで迫ってくるヘルゼーにととうシルフィーは折れた。

「わかったわよ。しょうがないなあ。ただし、旅しながらだし、その間修業もちゃんとするんだからね？」

「わかってるよ！ありがとシルフィー！」

全くこいつのこの笑顔にはかなわないなとシルフィーは悟った。

「話し変わるけど、もう少し回復してライティアの様子を見たら旅を再開するわよ。いつまでもここに居てもしょうがないし。」

そう言々とシルフィーは下へ降りていった。もう平気そうな顔をしている。空元気じゃなければいいんだけど大丈夫なのかなあ？

意識が戻ってからの行動が早い。ヘルゼーも続いて下に降りた。

「おはようライティア。具合はどう？」

「すこぶる快調よ。あなたから頂いた手刀の衝撃さえなければ全快といったところかしら？」

初めて声を聞いたが容姿と同様に美しい声だった。まさに鳥のように少し高めの声だ。

「まあいいわ。ヘルゼー君、シルフィー、あたしにかかっていた呪いはどうなったの？」

「ちよつとまつてね？今聖玉で調べてみるから。」

「また眩しく光らす気？」

「まさか！とうしてみるだけよ。」

「それならいいんだけどね！」

「えっと……。闇の比率は大分減少したわね。この調子なら日食が起きていても光の玉さえ持っていれば大丈夫！」

「本当?!嘘じゃなくて?!本当の本当に?!」

ライティアは目を輝かせて言った。

「ええ、本当よ。もう大丈夫!良かったわね!」

シルフィーはにつこり笑って答えた。するとライティアは信じられないという顔をしていたが、目からはとめどない量の涙がこぼれ落ちていた。

「もう、みんなと一緒に働けるの?外で遊べるの?自由に外出してもいいの?」

ライティアが言っていることは全部、普通の人なら毎日の生活の一部にあるような自然なものだ。いままでどれだけライティアが寂しい思いをしてきたのだろうと案じることは容易に出来た。

「良かったわね!」

2度目のシルフィーの言葉に、ようやく理解したのかライティアは号泣した。シルフィーに抱きついて。

「ありがとう!ありがとう!」

「本当に良かった。でも、こっちもあなたのおかげで聖玉も1つ手に入って良かったと思うているのよ?あなたがいなければ焦ってできなかったかもしれないし。」

「フフフ……そんなこと思っでなくせに!」

「バレたか……なんてね!本当にそう思っているから安心しなさい!」

2人は友達みたいに話していたのでそのままそつと家を出た……

……つもりだったんだけど!!なんで扉を開けた瞬間に村長+村人×40(っくか村人全員じゃないか?)がいるの?しかもみんなヘルゼーの顔を見た瞬間に

「ライティアは!?!」

で、異口同音ってこの事かっというくらい揃ったよ。だけどみんなが期待と不安の交じった顔してるから、本当に心配してるんだなっ

ていうのは物凄く伝わってきた。

暖かい良い村だな

ヘルゼーの居た町じゃ考えられないことかもしれない。村中の人々がみんなで1人を心配するなんて……。みんな働いて疲れてやつれた顔しながらでも生活のために働いていたし。

子供でも例外なく

倒れたら、看病ぐらいはするけどみんな自分のことだけで精一杯だったから基本はほうっておく形になってしまう。

正直な所、ライティアが羨ましかった。でも、みんなが答えを待っているから長い間ためてもらえない。

「大丈夫。呪いは消えたよ。今はシルフィーと話してる。」

「本当か?!」

第一声は村長。

「嘘ついてもしようがないでしょ?」

そのヘルゼーが発した言葉は村人を不安から喜びに変えるものだった。

わぁつとあがる歓声。耳をつんざくほどの音だけど、ちゃんと祝福の気持ちは伝わる。ヘルゼーはその歓声に交じる言葉もちゃんと届いていた。

「よかった!」

「おめでとう!」

そして

「ありがとう!」

こんなに感謝されたのは初めてかもしれない。正確にはヘルゼーではなく、シルフィーとライティアのことだけどそれでも嬉しかった。



まあバシバシ叩かれていたかったけどね……。

「みんな！めでてえめでてえ！ライティアが解放されたんだ！今日は1日宴と行こうぜ！」

生きのいい比較的若めの男性が威勢よく言うと、みんながそれに答えた。

「畑仕事終わったらな！」

現実的な一言のあと、ライティアの体に障るからと、みんな畑へ戻っていった。

そして公約通り一晩中お祭りのような騒ぎだった。

回復したライティアも参加し、大盛り上がりだった。一方シルフィはというと、もう少し寝ているといってベットへ逆戻りしていた。本当に大丈夫か心配だったけど翌日元気にヘルゼーを叩き起こしてきたので問題ないだろう。

そして

「お世話になりました。いつまでもここで止まっているわけにはいかないのです次の町にいきます。」

「いいえ、お世話だなんてとんでもありません！ウチのライティアを解放させて頂いて本当にありがとうございます！」

村人達と挨拶をかわし、ヘルゼー達はまた旅にでた。

## 第5話 危険な日食に襲われる村 後編（後書き）

感想・意見・批評等作者の成長のためくださるととても嬉しいです  
！よろしくお願いします！

大橋結菜

## 第6話 シルフィー先生の魔法講座（前書き）

会話文が多いので読みにくいかもしれませんが読んで頂けたら幸いです。

## 第6話 シルフィー先生の魔法講座

シルフィーとヘルゼーは村を後にしてさらに旅を続ける。

「さてさて、じゃ！魔法講座、よろしく願いします！」

「はあ……。」

「そんな明らかに嫌そうな顔しないでよ。」

「だってさあ……、だいたいあんたどこまで知ってんの？」

「え……。」

途端にヘルゼーは恥ずかしくなった。きっと自分はシルフィーの100分の1ぐらいしか知らないと思ったからだ。

「あゝ恥ずかしがらなくてよろしい！」

シルフィーがヘルゼーの心情を読み取ったらしい。

「え？」

「アンタみたいな孤児じゃあ魔法なんて感覚で使ってただけなんじゃない？」

「なんでそれを……?!」

「しょうがないから1から教えてやるか!!」

「いいの？」

「それしかないでしょうが、それともあんた独学で勉強でもする？  
言っとくけどメチャ大変よ。独学は。」

「よろしくお願いします!!」

「決断早っ！」

ヘルゼーの思考回路は約2秒でその答えを出した。

「じゃあ基本中の基本。魔力をためやすい体質の人を1発で見分ける方法は？」

「髪と瞳の色！」

「正解！じゃあ何色が1番ためやすいの？」

「紫がかった黒！」

「正解！んじゃあ逆に1番ためにくいのは？」

「白!!」

「OK、基本は大丈夫みたいね。じゃあ赤と青だったら?」

「え……つと?」

「ふう……やれやれね。黒に近いほうがためやすいんだから?」

「ああ!青だあ……!!」

「叫ばなくてよろしい。つかうるせえ。」

「はい……すみません。」

女の言葉じゃねえ……。どちらかというと……野郎だ。いいのか?こんなんで。

「じゃあ属性は何種類あるの?」

「火・水・氷・風・雷・聖・闇だから7種類?」

「一般的にはそう言われているけどまだあるのかもしれないのよ? 最近あまり他国との関わりを持たないから知られていないと思うけど噂では木や植物と会話ができるようになる魔法まであるらしいから。」

「それは何属性かわからないの?」

「微妙に共通点があるのは風なんだけど風属性ではないみたい。」

「ふうん。じゃあまだわかんないんだ。」

「そ……ゆ……こと。まあ一般常識があるか無いかを見定めたかっただけだから気にしないで大丈夫よ。」

「じゃあ玉と聖玉の違いってなんなの?」

「瞬シルフィーがビクツと反応した気がしたが気のせいだろう。」

「玉は植物からとれるわよね?」

「うん。僕とシルフィーがあつたのもそこだったし。」

「聖玉は植物からはとれないわ。」

「ええ?!そんな玉聞いたことないよ?!………さてよ、じゃあシルフィーはどうやってとってきたのさ?」

「聖玉ができたのは、遙か昔、まだ魔法文明が生まれてない頃……そうねえ人類があらわれはじめた頃にさかのぼるわ。」

「そんなに?!」

「ええ。半ば伝説化してるところもあるんだけどね。」

「うん。詳しく聞かせてね!!」

するとまるで語り手のようにシルフィーは語り始めた。

「その昔各地に守護してくださる神々が居て皆は平和に楽しく暮らしていた。また、神々達の仲も良く、争いという言葉すら存在していなかった。そんな平和な世界にある時一人の男がこういった。『我々は皆、各々の神を祭り上げ信仰しているが、本当は誰が一番頼りになるのだろうか?』神々も人々もそんなことは考えたこともなかった。一番を決める必要はないと考えていたからだ。しかし、一度言われてみれば気になるのが人間の性。神達は各々治めていた人間達にそんな必要はないと悟したが一向に聞く耳を持たずついには神の今までの恩恵を忘れ争いを始めた。多くの死者と悲しみがうまれた。大地には悲しみと血、憎しみが蔓延し、皆つかれはてていた。神々は世界の浄化のために長雨と干ばつを交互に繰り返した。そして神はこういった。『おまえ達人間が改心し、争いをやめるまで私たちはしばし人間界から手を引こう。いつか我らの思考を理解し、本当に平和な世界を皆が望むというならばその時は手を貸そう。過ちを繰り返してはならぬ。いつかわかつてくれるその時まで待つことにしよう。我らはしばし、眠りにつこう。』神々は世界から身を退いた。それでも争いはとまらなかった。神が姿を現さなくなってから、余計に激化した。もはや、怒りと憎しみの戦いになっていた。そんなとき一人の少女が現われた。少女はある力を生まれたときから持っていた。『玉を生成する力』。彼女はその特殊な力により神の居場所を秘かにつきとめた。そして、神にこういった。『私が戦を止めましょう。神様。そのかわり私に力をお貸しください。神々の聖なる力をこの玉にお納めください。私が解放し、人々の心を浄化します。』神は力を分け与え、その少女の活躍により、戦は終わった。」

「じゃあその分け与えた力っていうのが今の聖玉につまっているっていうわけか。」

「そ〜ゆ〜こと。だけど聖玉自体に神が宿っているって言われていて、封印されてるからそれ自体を持ち出すことは不可能。だから今はその聖玉の力を玉に移し替えて持っているの。だから今私が持っている聖玉はコピーね。」

「聖玉って奥が深い。」

「まあ、歴史が非〜常〜に古いつつ〜ことはわかった？」

「うん。でも、その女の子すごいね〜一人で戦を止めちゃうなんてさ！」

「古文書によると、その子は神の力を完全には使いこなせなかったみたいよ？だから後世に闇がのこったみたいだし。」

「ふ〜ん。で、その女の子はその後どうなったの？」

「亡くなっただわ。力の使いすぎでね。」

「可愛そうだね、若いのに。」

「まあ神の力を使うんだもん。十分すごいわよ。」

そしてヘルゼーに一抹の不安がよぎった。

「シルフィーは……死なないよ……ね？」

確認するかのように聞いてきたのでシルフィーは答えた。

「当たり前じゃない?!死ぬわけ無いでしょ!」

ヘルゼーに安堵の表情が戻ったのがわかった。

## 第6話 シルフィー先生の魔法講座（後書き）

意見・感想・批評等作者の成長のため頂けたら嬉しいです。よろしくお願ひします！

大橋結菜



## 第7話 機械仕掛けの街（前書き）

今回は普段になく短くなってしまいましたが、読んでいただけたら幸いです。

## 第7話 機械仕掛けの街

「さてと、魔法の話は一旦終了!」

「えっ?なんで?」

「次の町は少し問題があるからよ。」

「どうゆうこと?」

すると、シルフィーは玉でスクリーンをだし、町の外観を映し出した。機械が目立つ。とにかく目立つ。

「なに?この明らかに機械ばかりの街は。」

「これが次の街、ハイ・ギアントよ。」

「まさに今のごじせいを表してるような街だね。」

「その通りと言ったところかしら。」

するとシルフィーはふうつとため息を吐いた。

「なになに?!何でそんな憂鬱そうな顔してるの?」

「ヘルゼー、一つ質問するけどここが2年前まで前の村みたいに農業が盛んだった街に見える?」

「はあ?!ありえないよそんなの!前から機械ばかりの街だったんじゃないの?」

「それが違うのよね……。こんなに機械っぽくなったのは、2年前からのよ。」

「ええ?!」

「実はここの街、町長が代わって以来急に機械の導入が始まったのよ。」

「何でまた急に。」

「先代の町長は闇否定派だったんだけどね、その孫娘に代わって以来どうも金回りが急によくなったの。ということは闇からの援助を

受けているとしか思えない。つまり、闇を肯定してるとしか思えない。」

「ずっと思ってたんだけど闇って具体的になんなわけ？」

「誰にでもあるけど具体的に言うなら、光を撲滅させるためにできた、帝国があると聞いたことがあるわ。」

「帝国う?!」

「ええ。どうやら心の闇に吞まれたもの達がさらなる闇を求めて集まる場所のよう。そこは、特別闇が深いポイントらしいわ。」

「へえ〜。世界には僕の知らないことが沢山あるんだね……。」

「私の知識でさえ世界の10分の1ぐらいしかないんだからあなたの知識なんてきつと100分の1ぐらいね。」

否定、したい……けどできない。くそう。

「まあいいわ。話を戻すわよ。」

「うん。」

「つまり、神に貢献する私たちが街に入れないかもしれないのよ。」

「なんで??」

シルフィーは大きくため息をついた。

「どうせ馬鹿ですよ。」

「開き直るんじゃないの〜!」

「え〜。」

「え〜。じゃなくて。」

「むう…………。」

「向こうにしてみれば敵でしょう? 私たちは、闇を滅ぼすためだけにいるんだから。」

ヘルゼーはポンっと手を叩いた。

「なるほど。」

「わかった?」

「うん。じゃあどうやって入るの?」

「それが噂によると常に検問がしかれてるらしくて忍び込むのは無理。正面突破しかないみたいなのよね。」

「は?! シルフィー、それ矛盾してるよ?」

「そんなことわかってるわよ。だからあたしが言いたいのとは問題が起こることは必須。下手すると戦いになるかもしれない。だから準備はしておいてって事よ。」

「要するにいつでも戦えるようにしておけて事?」

「そ〜ゆ〜こと。」

「じゃあ、また、修業?」

「なんだ、わかってるんじゃない!」

どうしてこう……嫌な予感って言うものはあたってしまふのだろう。「大丈夫よ。次の街は国境に近いからまだまだ歩かなきゃならないから時間はたっぷりあるもの!」

なんであんなにいきいきしているのかはわからないが、ヘルゼーは少し不安を覚えた。シルフィーが恐いわけではない。ただなんとなく次の街に行くことが大変な事のように思えて仕方なかった。このいよいよの無い不安は証拠もないのだがヘルゼーのなかではあきらかに大きくなりつつあったが、シルフィーに打ち明けるわけにも行かず、ヘルゼーは一人でもうもうとするしかなかった。

## 第7話 機械仕掛けの街（後書き）

意見・感想・批評等いただけたら嬉しいです。作者成長のためご協力お願いいたします！

## 第8話 町長登場

これまでにこんなに疲労を覚えたことがあっただろうか？もうかれこれ18時間程歩いている。なのに、歩いても歩いても見えるのは一面に広がる草原ばかり。いつになったらあの機械ばかりの街が見えてくるのだろうか。

「シルフィー？いったいいつになったら次の街につくの？」

「あと2時間くらいじゃない？だいぶ近づいてきたし。」

ヘルゼーはもうくたくたで足がぼろになっていたのに、シルフィーはといえば少し汗をかいているくらいだ。これも魔力の差か？と、急にシルフィーがくるりとこちらをむいた。

「ほら、みてみて。」

「ん？」

シルフィーは地面を指差して言った。

「草原の土質が変わってきたでしょ？さっきまでは砂地だったんだけど……。」

「本当だ。なんか石みたいのがごろついていた。」

「こういった石がでてくるようになったのは他でもない機械故ね。」

「どういうこと？」

「機械に必要なエネルギーを放出する石があるのよ。見た目は普通の石なんだけどね、日の光にあてておくだけで1度使った石でもまたよみがえって何回でも使えるって話よ。」

「ふん。」

すると遙か遠くに街らしきものと前にいた村ほどではないが薄く暗い雲のようなものがたれさがっていた。

「シルフィー、あの薄暗い街？」

「街はあつてるけど薄暗くなんて無いわよ？疲れが相当でてきたんじゃない？幻覚をみるなんて。」

まただ。ヘルゼーには見えてシルフィーには見えないあの大きくたれ込めた雲。何度も目をこするけれどしっかり見える。シルフィーの言うとおりの幻覚とも思えない。

「さあてと、街に入る前に野宿するわよ。」

「え？なんで？」

「馬鹿ね。仮眠をとるのよ。言ったでしょう？いつ戦いが起きても大丈夫なように準備しておきなさいって。体力勝負になるところもあるかもしれないじゃない？」

「なるほどね。」

「実感はわからないでしょうけど、あんたも少しは修業のおかげで体力もついてきたことだし。」

確かにそうだ。今までは10回玉の変形をするだけでバテバテだったのに今や25回は軽がるできる。

「まああとは、剣術とかいろいろ使いこなせるようにしなきゃだけど。今は十分だから。」

「誉めてもらうなんて初めてかもね……。」

そう言ったとたんヘルゼーは崩れおちるように倒れ、そのまま意識を捨てた。

気付いたのはそれから7時間後。シルフィーに起こされた。もう朝になっている。

「仮眠のはずが、おもいつきり眠ってたわね。でもそろそろ出発しないかね。」

眠い体をむりやり叩き起こして歩き始めた。近づけば近づくほどわかる。この街が国境付近だということが。何気ない普通の1日の始まりなのに休む事無く警備員が検問を行なっている。「ご苦労さまだ。」

「で。この検問を正面から無理矢理突破するの？」

「ええ。最初は交渉するけれどきつと通してくれないと思うから。駆け抜けるしかないわ。もともと、通過するだけの街だもの。」

「無理があるよね……?」

「だからいつてんじゃない。戦う準備はしておきなさいって。」  
平然と話せるシルフィーはすごいと思った。

そうこうしてる間にだいぶ近づいたようだ。もう機械の音が間近に聞こえ、検問のレバーが上がったり下がったりする音や、笛を吹き交通整理をしている音まで聞こえる距離になっていた。

すると、予想通り一人の警備員が走ってこちらにやってきた。

「君達イ。この街の人間かい?」

「違います。」

「困るなあ。この街は今町民以外立入禁止なんでね、お引き取りください。」

口調は丁寧だが、明らかに嫌そうな顔をしている。

「通り抜けるだけなんです、隣の国に行きたいので。」

「どんな理由でも駄目なものは駄目なんだ。そういうことだから。」

それでもシルフィーは食い下がる。

「何故駄目なんですか?これじゃあ隣国に観光にもいけやしない。」

とうとう警備員がキレたらしい。

「あのなあ!!文句なら俺に言わずに町長にでも言えよ!とにかく駄目なんだ!さっさと帰れよ!こっちも暇じゃないんだ!」

するとシルフィーは待ってましたといわんばかりに、宣言した。

「わかりました。じゃあ、私たちは街に入って町長に話をつけてきます!では!」

そう言い放つと検問を無理矢理ブチ破り強行突破して警備員の制止を振り切り走りだした。

「オイ待てエエ!?」

「シルフィー!やつぱり無茶だよ。いつか捕まっちゃうよ!」

「それが目的よ!」

「はああああ?!」

ヘルゼーは意味がわからず叫んだ。



「街の中心に向かうわ！そこに町長がいるはずだから、そこで帝国に宣戦布告するわ！あなた達を滅ぼす使者が現われたって事をしらせてやるのよ！」

「何でこの街なの？！」

「闇に堕ちた人がたくさんいるこの街から逃げたらたいしたもんでしょ？！それを実践して、闇に、帝国に思い知らせるためよ！」

と、そうこうしている間に街の中心街を走っているようだ。機械の街の機械が急に増えた。

そして、一際大きな工場の前に出た。どうやらここが町の中心らしい。

と、思い立ち止まった瞬間、上から声が聞こえた。

「あなた達が犯人のようね。」

女性の声だ。あまりに突然だったので2人とも歩を止めてしまった。上を見ると巨大なビルのレストランからヘルゼー達を見下ろす人がいた。髪は白。シルフィーより少し長いらしく腰の辺りまで伸びている。

目は灰色。もしかしてこの人が……

「町長？！」

「正解。」

すごく美しい人だと思う。だけどすごく冷たい瞳をしているように感じられた。

「許可もなく私の町に堂々としてくるなんて良い度胸してるわね。」

明らかに高圧的な態度。あゝあ。こりゃシルフィーとは相容れないタイプだな。

「私たちはこの街を通過したいだけ。特に戦うつもりもあなた達とも争うつもりはないわ。」

そんなシルフィーの言葉を聞いた瞬間、いきなり笑いだした。

「フッ。あはははは！ははは！何を言いだすの？あなた達も知ってるんでしょ？この街は帝国を受け入れてるって事。見るからにあなたたち、魔力にあふれているみたいじゃない？とくにあなた。そん

なつややかな黒髪なんてみたことないわ。でも、ここは闇の街。あなた達は明らかに神の使いみたいじゃない？その容姿からしてね。まるで伝説に出てくる少女のよう。ということは私たちの敵。つまり……」

すると、突然町長が手をたたいた。途端に、四方八方を武器を持った町民達にかこまれた。

「ここで殺しておくべき存在よね。いつか牙をむかれたら困るし。だからあなた達にはこの街を通る資格がないのよ。」

## 第8話 町長登場（後書き）

意見・感想・批評などいただけたら嬉しいです。作者成長のためよろしく願います！

大橋 結菜

第9話 闇に堕ちた街、光を愛するもの。ゝ1ゝ（前書き）

書きためることがなかなかできないので不定期になってしまってます訳ありません。なるだけ早く書いて投稿いたしますのでこれから  
もよろしくお願いいたします！

## 第9話 闇に堕ちた街、光を愛するもの。く1く

シルフィーは突然1歩前に踏み出して町長に言い放った。

「私たちにこの街を通る資格が無いですって？ふざけんじやないわよ。私たちは私たちで勝手に通らせてもらっわ。」

「だから私たちはそれを許可しないって言ってるのよ！魔力が強いとか聖なる力を操れるとか関係なくね！」

「なによ。そんな事言って。止めたいなら止めれば良いじゃない。」

「シルフィー、争わないほうが……」

「ヘルゼー、少し黙ってて。」

「はい……。」

女と女の戦いだ。まあいわゆる世間一般で言われている“修羅場”というやつだ。両者の背中から鬼がでてる。

「ええ。もちろんそうさせていたたくわ！」

すると、シルフィーが小声でヘルゼーに伝えた。

「（私の服の袖をつかんでて！）」

「え？」

「（いいから！）」

ヘルゼーがシルフィーの服の袖をつかむと同時にシルフィーは何か唱えた。その瞬間2人は薄い光のベールにつつまれた。

「かれ！」

町長が命令したとたん周りにいた町民が一気に襲い掛かってくる。

「シルフィーくるよ！」

サツと玉を取り出したヘルゼーをシルフィーは止めた。

「シルフィー？」

「ちよつとこのままでいて。大丈夫だから。」

ヘルゼーにはまったく意味がわからなかったが、とりあえず意を決してその場に立った。シルフィーが大丈夫だと言っているのだから信じようと思った。けれどそんな2人を殺すべく武器を持ち、武装

した人の群れが容赦なく襲ってくる。

斬られる！そう思い目をつぶった瞬間だった。

バチン！！激しい衝突音の後激しい痛みとともに温かい液体がヘルゼーから流れ出てくると思った。

が、しかしいつまでたつても衝撃も痛みもなかった。そつと目をあけると襲い掛かってきたはずの町民の手が焼けていた。

「あ……れ？」

町長の顔が強ばると同時にシルフィーが笑った。

「あゝれゝ？痛くも何とも無いなあゝ？」

シルフィーがおどけてみせると、

「なっ！どういうこと?!」

と町長が叫んだ。

「私は神からの使いよゝ？？闇に汚されたあんたらなんかがこのあたしに触れるわけ無いじゃない！」

そんな裏技ありかよ！と突っ込みたくなるのを我慢して、事の成り行きを見守ることにした。

町長の顔が一段と強ばる。

「卑怯な！」

「卑怯ゝ？別に生れ付きだから仕方ないしゝ。ということで勝手に通りまゝす！」

高らかに宣言をし、また更に走りだす。

「ヘルゼー、できるだけゆっくり走って！」

「なんで?!」

町民がどんどんせまってきた。

「言ったでしょう?!一度捕まったほうが良いの。大丈夫、あたしの考えだと牢獄には闇に染まりきれてない人が幽閉されてるはずだわ。きつと男女でわけられて。だから、その人たちを解放するのよ。」

「でも、ぼくらは捕まったら身動きできないんじゃない?」

「あなたにも光の守護魔法をかけてあるから平気! 鎖くらい簡単に外せるはずよ!」

「ここまでできたら仕方ないか!」

町民が棒を振り上げる。

「あれ? でもさつき攻撃あたらなかったよね?」

「あれはね、実は1回限りなんだ。魔法なら何回でも弾くことはできるんだけどね、物理攻撃は1回だけなのよ。」

「なるほど。じゃあこの棒は当たるわけね。」

「やけに冷静ね。痛いわよ? 一応。本気で殴ってくるから。」

「もう慣れっこだから大丈夫だよ。」

「え? どーゆーこ………」

その瞬間二人同時に殴られ意識がとんだ。

冷たい感覚で目が覚める。

「あれ? ここって……?」

そうだ。殴られて気を失っていたんだ。って言うことはここは……

「牢獄……か……。」

まだ頭がガンガンするがヘルゼーはシルフィーに言われたとおりの行動をすることにした。

鎖は本当に簡単に外れた。

「こんな簡単にはずれていいのかよ……。」

とりあえずヘルゼーは檻から兵隊がいるか覗き込んでみた。角に一人。通路に巡回兵らしき兵が一人。なるほど、街の検問に回っているせいかこの警備は手薄だ。

「こゝゆゝときはチャンスだな？」

ニヤリと笑ったその表情は悪人そのものだった。

ヘルゼーは持ち物の殆どを没収されていたが、口腔内に隠しておいた小さな玉はばれていなかったようだ。小さな飴玉のような玉を口の中から取り出し念じる。小さめで、働きは普通の玉と少し違い、生物に擬態し主人の命令したとおりに働く。

「よし。蝶に擬態！」

すると玉はひらひらとまるで小さな宝石のような輝きを持った蝶に変身した。そして……

「兵隊の前をひらひら舞うんだぞ。きつと欲の深い奴らしか居ないからめずらしいものほしさにつられるから。そして僕がいる場所からはなれて兵隊を遠ざけるんだ。いいね？」蝶はこくりと頷いてひらひらと舞去った。

そしてヘルゼーの予想通り兵隊は引つ掛かった。

「お？なんだこの蝶は！？こんな大きくて綺麗な蝶が居たのか。これは高く売れそうだ！」

まさかこんなに簡単に引つ掛かるとは……。

「おわあ？！おゝい！そいつ捕まえてくれ！金は山分けにしてやるからよゝ！」

「いい金になるんだろうな！」

「当たり前だろ？そんなの見たこともねえ！きつとレアさ！」  
「なるほどな。それ！お？以外と早いな……。」

兵士が蝶と格闘している間にヘルゼーはそつと檻から抜け出し、探索してみることにした。牢獄のなかは薄暗く、唯一の光は火属性の玉が放つ炎の怪しげに揺らめく光だけだ。さらに地下室のようなので壁は冷たく、湿気でじめじめしていて触ると水滴が付く始末だ。



「こんなところに閉じ込められているなんて……。あんまりだ。」  
と、一つの檻の前に立った。中に誰がいる。が、暗くて見づらい。  
ヘルゼーはそつと声をかける。

「あの……………」

「誰?! 兵隊じゃないのか?!」

「あまり大きな声をださないで。僕はヘルゼー。先程捕まったけど  
逃げてきたんだ。きみは何か罪を犯した人かい？」

「とんでもない! 僕はただ普通に暮らしていただけさ! 明るく楽し  
く。でも、正しいことを正しいっていったらここに連れてこられた  
んだ。反省しろって。」

声から聞くに少年だ。年は10歳ぐらいだろう。と、やっと顔を出  
した。

「お兄ちゃんも悪いことしてないんでしょ? ここに捕らえられた人  
はみんなそうだもん。」

予想どおり10歳前後の少年だ。髪も瞳も鮮やかな緑色をしている  
が、そんな鮮やかな色に不釣り合いな粗末なぼろぎを着せられてい  
る。

「さつき大きな黒い蝶がとんでったよ。黒色なのに模様がカラフル  
だったね。紫とか黄色とか。お兄ちゃんが兵隊をまくために作った  
んでしょ? 頭良いねお兄ちゃん。」

「そんなことないさ。」

「お兄ちゃん僕らを助けてくれるの?」

「当たり前さ! そのためにきたんだから。」

「そうなの?」

「そうとも!」

「じゃあ、僕らはどうしたらいい?」

以外と冷静で頭のいいやつだと思った。ふつつなら早く助けてとか  
いうはずなのに……

「そうだな、一回この監獄の地形と兵の配置を探ってくるからここ

にいてくれ。分かりしだいここに戻ってくるから、安心して待っていて。」

「信じるよ、お兄ちゃんのこと。なるべく早くしないと監獄守って言う強いのがでてるから気を付けた方がいいよ。それから、僕少したら魔法も使えるんだ。だからお兄ちゃんがいないことがばれないように幻覚を作っておくよ。」

「そんなものまで作れるのか？」

「うん。僕の魔法は玉は必要ないんだ。遠隔操作の幻魔法だからね。」

ヘルゼーは話の8割り方わかってはいなかったが恥ずかしいのでわかったふりをして、うなずいた。

「わかった。じゃあ後でな。」

「あ！ちよつと待つて！この監獄に1人お爺さんがいるはずなんだ。もしここから逃げ出すときはそのお爺さんを出してあげて！先代の町長さんなんだ！いまはこの監獄のどこかに閉じ込められてるはずだから！」

「わかった！」

ヘルゼーは再び走りだした。

監獄内を歩いてみるとなかなか広いが造りは簡単だということがわかってきた。

四角い箱のような形で造られてて階段が3ヶ所。

一つの通路に罪人と称される人が入る檻が10スペース。

1フロアで40人収容可能だ。

だが、これだけでは少ないはずだからきつと地下5階ぐらいまでに及んでいるだろう。

体感温度からしてここは地下3階ぐらいか？まああれだけ騒いだんだから奥深くに入れられて当然だろう。と、シルフィーはきつと地下5階に入れられているだろう。シルフィーのことだからさほど心

配は必要ないと思われるが、拷問などを受けていないかだけが心配だった。あんな白い肌に傷が付いたら目立ってしまうがないだろうし。

さて、さっきの少年が言っていた老人だがこのフロアにはいなさそうだった。きつと最深部に入られていることだろう。お年寄りは大切にしなきゃならんのに……。

一応、フロアごとに逃がしに行くことにした。この人数でそろそろ逃げたらさすがの兵も気付くだろう。また少年に声をかける。

「おい。戻ってきたぞ！」

「お爺さんは！？」

「このフロアには居ないみたいだ。フロアごとに逃がすからまずはおまえらだ。今鍵を開けるから待ってるよ。」

「鍵？監獄守にあったの？マスターキーは監獄守が持ってるんだよ？」

「鍵なんていらさないさ！いまの僕なら……」

ヘルゼーは鍵のかかっている錠に手をかけた。すると、ガチャリ。思ったとおり。シルフィーからは直接聞いてないがこの町は聖属性の力に果てしなく弱い。だから鍵がなくても簡単に開く。

「光の守護魔法が何か？」

「詳しいね。その通りだよ。」

「一応、魔法学校に通ってたから。」

「なるほどな！そらあいたぞ。まずは僕についてきてね。」

「他の人も逃がすんでしょ？僕も手伝うよ。できるだけ多くの幻影を作ってばれないようにするから、僕もお兄ちゃんに最後までついていくよ。」

「大丈夫か？」

「うん。僕はグアニス・ハイフェ。お兄ちゃんは？」

「ヘルゼー。アドベア・ヘルゼー。よろしくな！ハイフェ。」

ハイフェとヘルゼーは共同作業でどんどん逃がし始めた。幸い、兵隊はあの蝶のおかげでこのフロアにはあまりいなくなっていた。

ヘルゼーは檻の中にいる人たちは子供ばかりだということに気付いた。なるほど純粋で素直な子供はこの町にとっては邪魔だということか。

しかし、あまりのんびりはしてられない。できるなら、シルフィーの手助けに行ったほうがよさそうな気がしてきた。

ここに兵士が少ないのは蝶の力もあるけどシルフィーのいるところに集まっているからなのかもしれない。とにかく万が一のことも予想して早めに行動することにした。

第9話 闇に堕ちた街、光を愛するもの。くくく（後書き）

意見・感想・批評等いただけたら嬉しいです。作者成長のためよろしくお願いいたします！

大橋 結菜

第10話 闇に墜ちた街、光を愛する者。〈2〉

「う……ん？」

ようやくシルフィーは目を覚ました。ヘルゼーとは違い一発で状況を判断した。

「地下5階ぐらいかな？最深部だと嬉しいんだけど。」

のんきに伸びをする。決して今の状況がわかっていない訳ではない。ここからいつでも抜け出せるという自身があるのだ。

今のシルフィーの状況はこうだ。

手錠に足かせをつけられ壁にはりつけになっていて、首にまで首輪がはめられている。

しかも頑丈な厚い鉄製の物でわざわざ魔力を吸い続ける性質の玉まではめてあり、魔法も使えないようなひどい状況だ。が、問題は無い。魔力を吸われたところでシルフィーの余りある魔力が果てるはずが無い。この街にくるまでの間にもすっかり基礎練はしていたし、逆に魔力は増幅していた。魔力の使いすぎで倒れることは聖玉を解放するとき以外はまず無いだろう。

すると、目の前に1匹の蝶が飛んできた。

「（これって確かヘルゼーの……）」

そして早く手錠や足かせを外せと態度で示された。

「（むう……ヘルゼーの分際で……）」

だが、あまりの慌てぶりなのでひとまず従うことにした。不本意ながらも。

シルフィーは魔力を吸われてはいるものの、脱出するには十分な魔力があつた。そして、全身に行き渡っている魔力を右手に集め、まず右手を自由にした。そして左手についている手錠に軽く触れた。光の守護魔法のおかげであまり魔力を消費せずに全ての足かせをはずせた。

すると、急に辺りが慌ただしくなった。

きつとこの蝶を探しにきた馬鹿共だろう。

が、なぜか蝶がかなり焦ってシルフィーにもとの体勢に戻れというので同じ格好をした。すると蝶が自ら擬態を解き、鎖や足かせに擬態した。これならいつでも戦闘体勢に入れるとシルフィーは思った。同時にこの玉に自らの意志が入っていることに驚いた。ヘルゼーの体内にいたのだからヘルゼーの意志が入っているのは不思議ではないのだが自らの意志がある玉を見るのは初めてだった。

が、そんな穏やかな状況では無い様だ。急に兵達が集まり、通路の脇に整列をした。何が始まるのかと見ていたら角から女性と思われる人が現われた。髪は白でベリーショートの天然パーマ。瞳の色はクリーム色をしていた。背が高くて騎士隊長の様な格好をしている。「全員、敬礼！」

ビシツと言う音が聞こえるぐらい綺麗に揃った。

「ご苦労さま。」

しかも、シルフィーの檻の前で止まり、中に入ってきた。

「君が街を荒らした犯人だね？ずいぶん簡単に捕まってくれたじゃないか。………何が目的だい？」

「別に？あなた方の町長さんにも言っただけど、私たちはただこの街を通りたかっただけよ。」

「本当か？」

「ええ。」

「ウソだな。」

「はあ？！何ですよ？！」

「貴様！言葉遣いに気を付けよ！監獄守様だぞ！」

「関係ないわね……！」

すごみを効かせて言った。なぜかひるんでくれた。

「おっお前！この状況が分かっているのか？！」

「わからないとも思っの？」

「貴様……！！！」

「騒がないでもらえるか？それとも……………死ぬか？」

「すみませんでした！！」

「わかってくれればいいんだよ。ところで、君が良ければなんだが……………」

視線をシルフィーに向けながら言った。

「何よ？」

「私と戦ってみないか？」

「はあ？！！」

「君の魔力は飛び抜けている。本気を出せばこんなちんけな監獄ぐらい簡単にふきとばせるだろう？まあ、だから玉に吸わせてるんだけど。力試しをさせてはくれないかね？」

「私へのメリットは？」

「ふむ。ここから出してやろう。」

「交渉決裂ね。」

「何？」

「私がここからでるのは当然よ。命賭けてるし、魔力吸われて弱ってるところだし。」

「言ってくれる。」

「私の望みは私を含むこの監獄にいる全員をここからだすこと。ソレが条件ね。」

しばらく考えたあと結論を出したようだ。

「……………わかった。そうしよう。」

「で？形式はどうするの？」

「3回戦としようじゃないか。」

「なんだってかまわないわ。」

「種目は、フェンシング・魔法・鬼ごっこといこうじゃないか。」

「2つはいいとして、何で鬼ごっこなのよ。」

「もちろん条件付きだ。この監獄にいる兵士300人に一回も触れ



られないことと、最深部にお前等の荷物を置いてやる。もちろん、罠とかはナシだ。」

シルフィーは軽く微笑んだ。

「いいでしょう。わかったわ。」

「じゃあ早速1回戦の始まりだ。フェンシング場に行くぞ。」

フェンシングか……。やったこともないし、正直勝てるかどうかはわからない。けれど負けるわけには行かない。負けたらそのあとの私を待つのは死だ。一応練習風景をみてなんとなくルールをつかむ「やったことはあるのか？」

「ないわ。」

「そうか。ではこうしよう。初心者にはハンデだ。お前は魔法の使用を許可しよう。」

私の魔力を計るつもりだ。2回戦目に備えて。

だが、シルフィーは挑発に乗ることにした。

「あら、いいの？それはありがたいことだわ。」

「では、始めるぞ。」

戦ってみてよく分かった。こいつはかなりのてだれだ。素早い攻撃&リカバリー。相手に隙をあたえさせない。以外と戦いづらいな……。でも、こーゆー場合は！

シルフィーは攻撃をひらりとかわし攻撃させると見せ掛け、フェイントを入れたのち相手の顔めがけて風を発生させた。簡単に言えばつむじ風。相当な勢いに相手もさすがに吞まれて……

「チェックメイトよ。」

「まさかこんなやり方で負けるとはね。でも、まだまだこれからが本番よ！」

少しシルフィーは驚いた。なぜなら今までにシルフィーの魔法を目の前にしてひるまない奴は初めてだったからだ。

「そうね。でも次は負ける気がしないわ。」

「そうかしら？」

不敵な笑みを浮かべているところからしてなかなか魔法にも自身があるようだ。

「ああ、もし2回連続であなたが勝っても、3回戦目まで戦ってもらうわよ。」

「別にかまわないわ。」

「あら、以外ね。間違いなく拒否されると思ってたんだけど。」

「どうせ、私に拒否権はないでしょう？」

「先読みつてやつ？」

「どうでもいいわ。さつさと始めましょう。」

「そんなに焦らなくなつていいじゃない。」

「私たちには時間がないのよ。こんなところで止まったられないの。」

「ふーん。あたしには関係ないけどね。」

「そうでしょうね。」

「戦いの説明に入るけど、魔法対決は武器の使用を一切認めない純粹な魔力勝負でいかせてもらうわ。まあ、魔法で作った武器なら使用は許可するけど、普通の武器には強度が劣るから余りいい策ではないわね。あとは特に無いわ。何か質問は？」

「特に無いわ。」

「じゃあ、始めるわよ。」

「さつさときなさい。先手は差し上げるわ。」

「なめられたものね。」

冷笑しながらも相手の魔力が高まっていくのを感じる。空気がぴりぴりしてきた。そして、自分の回りにシールドを作りそこから刃を何百本とうちこんできた。だが、シルフィーからしてみれば甘すぎる攻撃だ。

「くどい。」

そう一言言つと自分の身の回りに光の魔法陣を描き、そこから大きな光の刃を3本出しそのまま床を伝わせて降り注いでくる刃を跳ね

返した。

「まさか、こうも簡単に破られるとはね。でも、まだまだこれから！」

「今度はこちらからいかせてもらうわよ。」

すると、シルフィーは自分の両手に緑の光の玉を作り、一つに合わせた。まるで無重力空間にある水のようなかんじだ。

「簡単にあてるだけじゃだめよね？」

さらにそこから一つの角をもった緑に輝きを放つ馬がでてきた。ユニコーンのようだ。

「それをどうするの？」

相手だつて黙つてみてはいない。シルフィーがユニコーンを作っている間に、黒い大きな球形をしたエネルギーの固まりを作っていた。そして、さらにそれを弓のような形に変化させてシルフィーに打放つた。

が、その美しいユニコーンは蹄を一回ならしただけですべてを消し去ってしまった。

「なかなかやるのね。」

「この子はそれだけじゃないわ。」

そういうとシルフィーは相手に向かって指を差し何かを伝えた。するとユニコーンは相手にエネルギー砲を口から放った。

「ちよっ！」

半端無い威力。簡単に言う幅の広いレーザー砲を撃たれた感じだ。相手はギリギリで避けたが服が軽く焼けていた。

「よく避けたわね？いいわ。名前を聞いてあげる。」

魔法などのバトルにおいては名乗らないことが多いのだが、相手を認めたときは別だ。名前を聞き尊敬の念を表す。

「レイラよ。」

「簡単で呼びやすくていいんじゃない？」

シルフィーは大分余裕だったがレイラはかなり追い詰められていた。なぜあんな大きな魔法を使い続けて平気で立っていられるのかが不

思議でしかたなかった。

第10話 闇に墜ちた街、光を愛する者。くく（後書き）

大変遅くなってしまい申し訳ありませんでした！！受験がようやく  
終わり、一段落したので、また書かせていただきます。今までのよ  
うに更新停止にはならないと思いますが、不定期なのは許してくだ  
さい。しがない学生なので。では。

大橋 結菜

## 第11話 闇に堕ちた街、光を愛するもの。くっく

が、しかしレイラは落ち着いていた。大丈夫まだ気付かれてない。それをよそにシルフィーは欠伸をしていた。

「何か隠し玉でもあるのかしら？このままじゃつまらないまま終わりますよ？」

自らのユニコーンをてなづけて、くりくりと毛をいじっている。

そして、レイラは勝利を確信した。

「かかったわね！」

「は？何が？」

シルフィーは全く分かっていない。

「私が簡単にやられるとでも思った？」

不意に後ろから同じ声がする。シルフィーがあわてて後ろを向くと

……

「なっ！どーゆーことよ！？」

後ろにレイラがいた。がしかし、前にもレイラはいる。

「さあ〜てもんだ〜い！何で同じ人間が居るんでしょうか？！」

「まさか……………幻魔法？！」

「せいかなぁ〜い！！頭良いねえシルフィーちゃん！」

そうだ。すっかり忘れていた。先代がこの街、いや、村だった頃野党が多くて幻魔法を強化してこの村の入り口をわからなくして必要な人以外は入れないようにしてこの村を守ったんだ。仕組みは分からないけど確か村人と力を合わせて守ったって本には書いてあつたはず。ということは間違いなくこの街の人はたいいてい幻魔法が使えるはず……………。

「ちっ！やられた。」

「魔力の無駄遣いありがとさん！ここからが本番だよ〜」

シルフィーは焦った。そもそも幻魔法というのはその物体に似せた実体の無い抜け殻のようなものを造りだす魔法だ。つまり能力の無

い者が使うと表面上は構成できても、立体化ができなかつたり反対側が透けて見えてしまつたりと、個々の能力の強さそのものが表れてしまうというシビアな魔法なのだ。しかし能力の高い者がこれを使用すると、実体があるわけではないはずなのにその者に触ることができたりする。仮にレイラのように能力のある者が自分を写取り、この魔法を使用すると、自分の使える魔法の少し弱まつた物が自分の幻が使えたりするのだ。（ちなみに感情は共用するので自分の分身が勝手に暴れたしたりなど暴走することは無い。）こいつが監獄守になれた理由がよくわかつた。

「……コイツ、予想以上にデキるんだ……。」

「やつと理解してくれたみたいね。それに幻魔法は普通の魔法とは違つて玉を使用しなくても使える術なの。低級魔法と同じ扱いになるけど、たかが低級とはいえない程使いようによちや使える魔法よ。読みが甘かつたわね。確かにあなたのほとばしる魔力は絶大。でも、こーいう時はあまり意味を成さないわね。」

イラつと来るけど仕方ない。コイツはデキる。それに今までの幻つまり、本来の力を出しているものではない。それであの強さ。本物となると……

「強さも今までの2倍つてわけ？」

「それはどうかしら？」

奥からもう一人のレイラが現れた。いや、よく見渡せばもう一人が出てきた途端シルフィーの周りにはもう何十人もレイラがいる。

「化け物？」

「人聞きの悪い。私はこう見えても魔法は得意なの。あなたには及ばないけどね。少しの魔力で何人も作れるつてわけ。」

が、シルフィーは先程までの焦りは消えていた。ある良いことを思い出したのだ。

「確かに、これだけの相手をするのは大変ね。」

「あら、意外と焦つてないわね。」

何十人と居るレイラの中の一人が言う。

「ひとついいことを思い出したのよ。」

「何かしら？」

「幻魔法は所詮低級魔法っていうことよ。」

「なにを……！！私を侮辱するつもりか？！この状態でどうなるのかわかっているのか？！」

「別に。侮辱なんてしてないわよ。ただね、気づいちゃったのよ。この魔法の弱点に。」

「どうということよ？！」

「あなたの分身が使った魔法の元はあなたよね。結局、弱まったものとはいえあなたの魔力を吸っていた事には変わりないわ。つまりあなたとあなたの分身は……」

するとシルフィーはいきなり目の前にいたレイラの分身の一人にグーパンチをお見舞いした。

バキッ！軽快な破壊音と共にわずかだが鼻血が出た。それと同時に周りにいたレイラも少なからずダメージを受けた。もちろんのことだが相手はキレている。

「~~~~~んにすんのよ！！」

「実験。っていうか確認ね。これで確証も付いたわ。ダメージも一様に負う。」

「フツ、流石ね。」

鼻血を拭いながらレイラが言う。

「その通りよ。でも、なぜこれを知っておきながら、こんなにたくさん自分の分身を作ったと思う？！」

「知らないわよそんなの。」

「守りきれぬ自信が有るからよ！！自分の思い描く最高の状態であなを倒す自信が！！満ち溢れていなければこんな危険な賭けなんてしないわ！！いいえ。できないわよ！！」

レイラ自信がかなり高ぶったらしい。何人かはもう戦闘体勢に入っている。そして、キレたレイラ達は一斉に先程の魔法でも見せた、黒い弓で一斉に攻撃してきた。そして、シルフィーは目を瞑った。



死を覚悟したわけではない。もしもシルフィーに当たったら、いくら幻覚の作ったものにせよ、大怪我は免れないだろう。レイラほどの能力者なら、もしかしたら物体に限り、実体化して作り出すことが可能かもしれない。というよりもうしていることだろう。それなのになぜ目を瞑ったか。それは、シルフィーの研ぎ澄まされた魔法の感覚で半体が放った弱い弓矢と、本体が放った強い弓矢を感覚で探し出そうと思ったからである。目を瞑ったのは、見えてしまうといくらシルフィーでも恐怖心が芽生えてしまうからだ。しかし目を瞑ればそこには一本の黒い弓矢。他の弓矢は軌道を読んで大体で避けていくしかない。何百本と飛んでくるのだから多少当たってしまうのは仕方無いので諦めて、急所だけをはずしていく。

「嘘……。何で一つも当たらないのよ……。ならば!!」

痺れを切らしたレイラがとうとう自ら弓矢を放った。その瞬間。

バシツツ!! 摩擦の熱ももろともせず、シルフィーがつかみ、目を開いた。

「見つけたわ……。」

体からの出血が生々しい。どれもみんな紙一重で避けていたのだから仕方がないが、どう考えても痛い。脚や腕、肩など至る所から出血している。綺麗な白い肌だからこそ余計に目立ってしまう。特に先程の弓矢をつかんだ手は赤くはれ上がり血が滴り落ちていた。

「何で平気で立っていられるのよ……。」

言葉を無くしたレイラ達は攻撃をやめた。

「北東の方角から今までよりも強い魔力を持った弓矢がちかづいてきた……。あなたね。」

シルフィーは一番窓側にいるレイラを指差した。

「なんて……魔力なの……。」

## 第12話 闇に堕ちた町、光を愛する者。〈4〉

レイラは愕然とした。それと同時にシルフィーがレイラを見て鬼のような形相で言い放った。

「あんた等にみくびられるほどヤワな鍛え方してないわよ。」

レイラ達の顔は一樣に恐怖の顔へと移り変わった。そしてそこがレイラの限界だったのだろう、次々にレイラの分身たちが消えていく。そして最後に残った一人がシルフィーが言った通り、北東の窓辺にいたレイラ。コイツが本物だ。

「クソッ!!」

すると目眩でもしたのかレイラがそこに座り込んだ。

「ふうっ。これもチエックメイト。2勝目ね。」

「まさか私がここまで追い詰められるとはね……。でもたぶん次はあなたでも助かるかどうか分からないわね。」

「どういう意味??」

「そのまんまよ。」

「たかだか鬼ごっこでしょう?」

「あなたは体のどの部分でも誰にも触られちゃだめなのよ。」

「もし触られたら?」

「あなたの負け。この場所に転送される仕組みになっているわ。あなたにも呪い似た魔法をかけてあるからね。」

「それでこんなに体が重いね。てつきり魔力でも吸われ過ぎたのかと思っただわ。」

「フッお気楽ね。例えば髪の毛一本でも触れられたらここに転送されるわ。ちなみにその時はいくらあなたでも助からないような処刑台も一緒に用意しておくから。」

「それは怖いこと。」

「ぜんぜん怖がってる顔してないんだけど。」

「フフ。まあいいわ。ところでこの魔法はいつになったら解けるの

？」

「心配しないでって敵に言うのもなんだけど、この監獄を出れば自動的に解けるようになってるわ。というか私の魔力じゃそれが限界の範囲よ。ここまできて嘘はつかないから安心なさい。私も少し回復したらあなたを追い詰めに行くから覚悟しなさい。それから、この最深部、今も奥まった場所だけどその更に奥の奥の奥にあなた達の荷物が置いてあるからそれを取ってから行ったほうがいいんじゃない？この監獄は外からの魔法の干渉を受けない石で作られてるから一度外へ出てから取ることはできないわよ。まあそこにも兵士はいるだろうけどね。」

「ご忠告ありがとう。でもそろそろ行くわ。」

「せいぜい少ない命が長引くようにね。」

今まで戦っていたフェンシング場は捕まっていた部屋よりも浅い所にあるようだ。捕まっていたときよりもこの部屋は暖かく感じられたからだ。深い所に行くには、空気の流れを読むしかない。空気が流れている方は、どちらかというところと出口に近いはずだ。つまり、その逆方向。空気の流れがあまり無く、よどんでいる方に行けば、きっと最深部に出れるはずだ。

方向はわかった。しかし今最も重要な事はこの流れ出る血液をどう止めるかだ。先程の矢の嵐を食らって以来、肩に当たった一本の矢が思っていたよりも深くシルフィーの肉を裂いていた。肩から血がポタポタと滴り落ちる。刺さったわけではないので、腕は使い物にはなるがこの出血の量では敵兵に自分の居場所を教えているようなものだ。あいにくシルフィーは回復魔法が使えないので（昔挑戦した傷を広げる結果になりタイプが合わないという結論が出された）止血すらままならない。仕方ないので玉で包帯を作り出しそれを巻いておいた。簡単だが多少の役には立つだろう。止血はできていないだろうが、少なくとも血が床に滴り落ちることはなくなるはずと、そんなことを考えながら長く暗いジメジメとした廊下を歩いていると階段を見つけた。ラッキー！！目を輝かせたシルフィーだった

たが、下から声が聞こえてきたので慌てて隠れる場所を探す。が、無い。

「どこに逃げたんだ?!」

「この辺に居るはずだ!! 何が何でも探し出せ!!」

「でも、監獄守様でもきつい戦いになってるんだろう? 俺らなんかで役に立つのかなあ??」

会話の内容からして、まちがいに兵士だろう。

「時間稼ぎくらいにはなるだろうよ。」

階段を上ってくるようだ。カッンカッンと靴の音がする。ヤバイ。カッン…カッン…

どうしよう。これはまさしく絶体絶命!! そうこうしている間にも兵士は階段を上る。カッン…カッン…カ…

「こつちよ!! さあ早く!!」

どこからとも無く女性の声が聞こえる。女兵士かと思い慌てて振り向く。するとそこには……

「え??」

一方ヘルゼーはハイフェと共にもう地下1階まで来ていた。ヘルゼーが檻をの鍵開け、ハイフェが幻をつくり中に居る人間を逃がす。シルフィーの居るところと違いここは割りと光があり明るいので魔法を使わなければ簡単に逃げた事がばれてしまうのだ。が、そうはいえハイフェもそろそろ限界だ。もう何十人と違う種類の幻を作っているのだから当然だ。

「よし。ハイフェ、このフロアの幻を消していいぞ。」

「え?!でもそれじゃ……」

「いいんだ。どうやらシルフィーの方に敵があつまっているらしい。」

「なんで?」

「蝶だよ。さつきとばしたやつ。全然帰ってこないだろ?きつと何かあったんだよ。だとしたらこっちに大量の兵が来ることはまずない。」

「えっ?!でもそれって……。」

「うん。シルフィーがあぶないかもね。」

「いいの?!」

「良くないよ。だけど今は信じて、今やるべき仕事をやらなきゃ。」

「そう……だね。じゃあ魔法を解くよ!!」

「周りは見といたけどやっぱり兵は居なさそうだからいいよ。」

バアチインという何かがはじけたような音がした後元通りの静けさが戻った。ただそこに居るはずの罪人と称されていた人間が居ないことを除いて。

「体は大丈夫か?」

「うん。思ったより魔力は消費されてなかったみたい。少しだるいけどまだまだ幻を作るよ。」

「じゃ、このフロアのやつらは順番に上にのぼって、兵がいるか確認が済み次第一人ずつ周りに悟られないようにうまく逃げてくれ!」  
「了解。」

さて、このフロアのやつは逃がした。後残ってるのは……

「地下4階に行きますか！」

「あと2フロアくらいなら大丈夫。早く行こう！ヘルゼー兄ちゃん！！」

「そーだね！」

再びヘルゼーとハイフェは走り出した。

暗くてよく見えないが、そこには金髪の長いウェーブをした豊かな髪の女性が居た。鍵が開いていた。中に引きずり込まれた。

「ありがとう。でも、どうして助けてくれるの？？」

「どうしてですって？私たちを助けてくれるんでしょ？」

高く澄んだ声、暗くてもわかるほど肌の色が白く瞳は茶色だ。

「助けてくれないの？」

「いや、そりゃ助けるけど……。」

「だったら協力する。偶然だけどあなたが捕まる時にたまたま腕がこの牢に触れたの。そのときに錠が開いたのよ。」

「じゃあ今開いたわけじゃないのね。驚いた。この牢に触れた記憶が無かったもの。」

シルフィーは密かにヘルゼーの仕業かと期待したのだが違ったようだ。

「そうでしょうね。あなたが触れたときは気を失っていたから。わたしはアリア。メウス・アリアよ。」

「初めましてアリア。私はシルフィー。時間が無いわ。あなたを助けるにしても、このフロアに人達をここの集めなければならぬし。」

「

「心配しないでシルフィー。ただ助けられるだけじゃお荷物になると思ってこの監獄に捕まっている人達のほとんどの人はここにいます。」

シルフィーはきつゝいていなかったが、目が慣れてきてようやくわかった。アリアの後ろには50人ぐらいの人達が集まっていた。

「牢に入っていないとばれないの？」

「あなたが監獄守との試合を受けてくれたおかげで兵が手薄になっているの。」

「誰が全員の鍵を開けたの？」

「あなたの残したほのかな魔法の痕跡を見たら光の守護魔法だってわかったの。それよりシルフィーあなたひどい怪我ね。回復魔法は使えないの？」

「残念ながら。」

「私も得意なほうじゃないから傷は治せないわ。一応出血だけ止めてあげる。あなたの血が敵に場所を知らせてしまうから。ただ傷自体は治っていないからあとでちゃんと手当してね。」

アリアはそういい終わると光の玉をだしそれから小さな蛍のような発光体をシルフィーの傷にめがけて飛ばした。みるみるうちに出血はおさまり、深く切れたシルフィーの肩の肉があらわになった。

「痛々しくて見ていられないわ。本当なら完治させてあげたいけれど……。」

「充分よ。ありがとうアリア。」

「一つお願いがあるの。シルフィー。この監獄の最深部に一人のおじさんが捕らえられているはずなの。その人をここに連れてきて欲しいの。」

「なぜ？ここは女の監獄では？おじさんなら男の監獄のほうに入れているんじゃないの？」

「いいえ。そのおじいさんだけは特別な。この街にとってとても大切な人なの。詳しい話をしている暇は無いわ。会えばきっとわかるから。」

「わかった。」

「気をつけて、どこにどんな仕掛けがしてあるかわからないわ。」

「いろいろありがとう、アリア。きつとおじいさんをつれてここに帰ってくるわ。」

「ありがとう、シルフィー。」

感謝の言葉を聞く前にすでにシルフィーは牢を出ていた。あまり長い間同じところにとどまるのは危険だと考えたからだ。幸い近くに兵士は居ないようなので先程の階段を急ぎ足で下りていった。急ぎ足で進むが、足音はなるべくたてないように慎重に一步一步刻んでゆく。2・3分降りつづけ、ようやく最下層にたどり着いた。身も凍るような寒さと静けさ。何の音も気配も無いまるでその階だけ時が止まり動くことを忘れてしまったのかと思う程異様な空間だった。明かり用の玉まで無いので真っ暗だ。本当にこんな空間に人など居るのだろうか、と疑ってしまうほどだった。

「明かりよ、照らせ。」

呪文を唱えなくても明かりを指先に灯す事などシルフィーに取っては簡単なことだったがなぜか唱えてしまった。シルフィーの勘だったのだが、唱えなければ魔法が使えないような気がしたからだ。

指先にほのかな光が輝いた。以外と広い空間だった。兵士の居る気配はまったくしなかったのだが一応念のために激しい光の使用は避けた。



コツン……コツン……コツン……

シルフィーのブーツが地面を踏みしめる音だけがその空間に鳴り響いた。極度の寒さのためか、その場の異様な空間のせいかはわからないがとても息苦しく、いつのまにかシルフィーは肩で息をしていた。

「誰か……おるのか……？」

「うわっ！」

急にしわがれた声が聞こえてきたので思わず飛び上がってしまった。人のいる気配なんてまるでしなかったのに……。

「おお、兵士ではないようじゃな……。」

年老いた男性の声がした。ハスキーボイスだった。

「おじい……さん……？」

「はは……そうじゃの。ところでお嬢さん、何故こんなところへ来たのじゃ……？今日はなんだか兵も、ここの空気もざわついておるわ……。」

「えっと……あなたを助けに参りました。」

「ほほ……、ご冗談を。年寄りをからかうもんじゃないぞ……。」

「冗談ではありません。上の牢にいるアリアという女性に頼まれました。」

「アリア……、アリアとな？なるほど。ならば信じよう。名を。」

「カトレア・シルフィーと申します。」

「カトレアか……。懐かしき響きよ。」

「え？」

「何、こちらの話じゃ。ところでシルフィー。ワシをどうするつもりじゃ？」

「とりあえず、アリアのところへつれてゆきます。」

「そうか。」

そういつて老人は牢の奥から現れた。その老人の姿にシルフィーは驚きを隠せなかった。

「あ……あなたは？！」

「騒ぐな、上の兵にきつゝかれては元も子もないじゃろっ?！」  
髪は短くちじれてはいるがしっかりと生えていて色は白、憔悴しき  
つてはいたが意志のある強く優しい灰色の瞳。単なる老人ではな  
かった。前町長だ。

第13話 闇に堕ちた街、光を愛する者 〵〵 (前書き)

大変更新が遅れて申し訳ありませんでした!!

### 第13話 闇に堕ちた街、光を愛する者 Ⅴ

驚きを隠せないシルフィーに対して実に穏やかな眼差しで前町長はたたずんでいた。

「アリアから頼まれたんじやろう？さあ早く」

「もしかしてアリアさんってあなたの孫娘さんですか？」

こんな緊迫した状況なのにシルフィーにはそちらのほうに気がなっていた。

「左様。アリアは私の実の孫娘じゃ。」「と、いうことは今の町長は……。」

「まことに勘の鋭い娘さんじゃ。まさしく。現町長はわしの娘じゃ。恥ずかしながらの。」

「なぜこの町はこんなことに……。」

「なに、簡単なことじゃよ。わしが悪いんじや。仕事に惚けて幼い頃なかなか一緒に遊んでやれなかったんじや。きつと寂しかったんじやろう。そのうち“影”と遊ぶようになったんじや……。」

悲しそうな顔をしながら前町長は語る。シルフィーは警戒を怠る事無くその話に耳を傾ける。“影”と遊ぶとはどういうことなのだろう？

「あの、影で遊ぶってどういうことなのですか？」

「影と遊ぶということはじゃな、簡単に言つと自分の影に帝国の使者を憑依させるようなことじゃ。」

「すると、どうなるのですか？」

「影は自分の足元を離れないのだが自分とは違った動きをするのじや。子供には不思議な現象じやろう。自分の行動とは真逆の動きをするのだから。」

なるほど、とシルフィーは思った。興味本位の子供にはいい遊び道具に確かになるだろう。

「でも、それは……。」

「左様。あなたの考えてるとおりじゃ。他人の闇をおろすわけじゃから、自分の闇も大きくなってしまう。連鎖反応のように。そしていつかは自分の心は闇に食い潰されてしまう。」

「じゃあ今彼女の心は……。」

「いや、まだ闇に食い潰されてはおらん。見つけたのが早かったのだな。即座に禁止魔法をかけた。ただ闇をおろしていたせいじゃろ。闇が一番正しいと思っている。」

「じゃあまだ救えますね。」

シルフィーは気丈にいった。

「なんじゃと？」

「浄化魔法は試しましたか？」

「いや、それがこの街にはそんなに強い浄化魔法を使える者がいなくてな。一番簡単な浄化魔法しかかけておらんのじゃ。情けない話じゃろう。」

シルフィーは静かに首を振った。

「そんなことはありません。浄化魔法は、様々な魔法のうち一番難しい魔法です。力のある者でも適性により使えない術者も数多くいます。だから、あまり御自分を責めないであげてください。」

「ありがたい。あなたは使えるのであろう。適正に関しては申し分ないはずじゃ。」

「使えます。それより少しあなたに聞きたいことがあるのですが……。」

「……。」

「何じゃ？何でも言うてくれ。力になれることは何でもいたそう。」

「失礼ですがあなたの髪が白いのは、年齢によるものですよ？あ、あくまでも確認なので気を悪くされたら申し訳ないのですが……。」

「……。」

「もちろんそうじゃ。大丈夫わしは闇に巣くわれてはおらん。瞳を見れば分かっていただけだろうか？」

シルフィーは瞳を覗き込み確認し安心した。大丈夫だ。彼は清浄な

目をしている。

「申し訳ありません。罾では困りますので。ここで捕まってしまうと全てが無駄に終わってしまいますので。」

「分かっているとも。なに気にしてなどおらんよ。安心なされ。」

「そういえばあなたのお名前を聞いていませんでしたよね？」

「おお、忘れておった。いや、年を取るとはいやじゃの。わしの名はベルギンじゃ。」

「ではベルギンさん、参りましょう。アリアさんが待っています。」

「そうじゃの。」

ベルギンを檻から出しシルフィーは階段の様子を確認しに行った。大丈夫そうだ。兵士の声などが聞こえないから少なくともこの付近にはいないようだ。

「大丈夫そうじゃの。」

「ええ。行きましょうか。」

二人は階段を上り始めた。シルフィーが二三段前を行き安全を確認してはまた上るという作業を繰り返した。

それと同時にシルフィーは驚いた。なぜならシルフィーは階段をものすごいスピードで駆け上がっているの、当初はベルギンを一時安全な牢屋の近くにいてもらう予定だったのだが、同じようなスピードで彼もまた階段を駆け上り始めたのだ。しかも足音をうまく消しながら。どう見てもベルギンは七十を過ぎた老人だ。普通に考えて無理だ。

「すごいですね。そのご高齢でこれだけ走れるなんて。」

「ほ。昔はもつと早く走れたのに……。仲間と修行に励んだ日々を思い出すわい。」

なるほど、そういうことか。とシルフィーは思った。彼もまたきつと町長になる前の若かりし頃に町を闇から守れるようにと訓練に次ぐ訓練を重ねたのであろうと容易に想像できた。

## 第14話 闇に堕ちた街、光を愛する者々6

警戒しながら進んだ割には早くアリアの場所に戻ってこれた。これも、前町長の若かりしころの訓練のたまものだろう。今はそのことにただただ感謝しつつ、アリアに声をかけた。

「アリア！連れてきたわ！」

「シルフィー?!」

アリアは驚いていた。やはり彼女もこんなに早く帰ってくるとは思っていなかったのだろう。当人も驚いているぐらいなのだから当然だ。

「こんなに早いなんて……。あなたにまかせて正解ね。」

「いいえ。私もこんなに早く帰ってこれるなんて思ってたわ。全てこのベルギンさんの基礎体力が高いおかげ。」

「町長様っ！」

「お怪我はされておりませんか？」

町民からあがった数々の声はみな町長を気遣う物ばかりだった。いい街だったんだなとシルフィーは現町長に代替わりするまえの街を想像していた。こんなにも心配されるほどベルギンは人望があるのだからよほどよい街作りをしてきたに違いない。ただ私腹を肥やす能なしの輩としたらあり得ないことだ。

「皆の衆、あまり声をだしてはならぬ。気付かれてはもともともな

くなってしまうじゃろ。さあ、ゲートから逃げるのじゃ。」

そういうとベルギンは手を空中に伸ばして街の裏道と思える場所と牢獄とをつなぐ道をつくりだした。

「すごい……。」

シルフィーは思わず口ばしった。空間を繋ぐ魔法は上級者でないと使えず、大量の魔力を消費する。ベルギンのような高齢者が玉無しで使えるような代物ではないのだ。一体彼の实力はどれほどのものだろうか、と不思議に思ってしまうほどだった。

そしてベルギンは振り返りながらシルフィーに言った。

「本当に何から何まですまなかったの。ありがとう。わしらはもう大丈夫じゃ。連れがいるんじやろう？早く行ってやらんと。わしらは街の中にある店の地下に抵抗軍のアジトにもどるとするか。それから……。」

そう言うところベルギンは一息置いてシルフィーに言った。

「我が娘のことは気にせんでよい。」

思わぬ事を言われ、シルフィーは驚いた。

「え？」

「あんたさんは先を急ぐ身じゃろ？本当はこの街なんて通過するだけに過ぎん街のはずじゃ。それをこんなに時間をかけて町民を救ってくれたんじや。それだけで充分。我が娘を浄化する浄化魔法なんて使ったとったら、またしても多くの時間を費やすことになる。娘の



ことはわしらでなんとかする。だから連れを見つけてはようこの街から出なさい。」

「どうしてその事を……。」

シルフィーの身の上を知っている人なんていないはずである。そう、あの裏山の花畑を管理している叔父さんだけのはず。シルフィーには訳がわからなくなった。

「昔の修行仲間にお前のじいさんが居たよ。」

その一言でシルフィーは全て理解した。

そしてベルギンは涙を浮かべて言った。

「すまないねえ……。あんたらの力になるどころか足を引っ張ってしまつて。あんたら一族に世界はたよりきりじゃ。無力な我らを許してくれ。」

アリア達他の町民はベルギンが涙ぐむ様子を見てとまどっていた。その様子を見るにシルフィーの家の事情を知っているのはベルギンだけのようだ。そしてシルフィーは優しく言った。

「ベルギンさん。私達はそれが使命です。そのために生まれてきたのだから。私の祖父母のことも仕方ないのです。だから、もう行つてください。いつか、娘さんも必ず浄化してみせます。」

それを最後にベルギン達は牢獄から去つて行つた。

「さてと……。」

感傷にひたっている暇はない。早くヘルゼーにあわなくては。ベルギンを探すついでに走り回ったおかげで、この牢獄は2つの塔のよなものでできており、丁度地上の高さのところと塔と塔を繋ぐ回廊があるようだった。とりあえずシルフィーは警戒しながら階段を登った。

と、本当に唐突にクリーム色の髪をした少年が顔を出した。小さな男の子をつれている。見た目8才ぐらいだろうか。とても利発そうな目をしていた。

「シルフィー?!」

ヘルゼーはシルフィーに気づいた。

「どうしてこんなところ……」

「走って!」

ヘルゼーはシルフィーの言葉を遮って叫び、こちらに向かって走ってきた。よくみれば後ろにはたくさんの兵士を連れたレイラがいた。

「いたぞー!」

走ってきたヘルゼーと合流して出口への道を探そうとした。が、ヘルゼーはもう出口を知っていたらしく、シルフィーの腕をつかんで走った。

「こっちだ!急いで!」

兵士の足音とレイラの怒号が聞こえる。全力で逃げる。全力で追う。

シルフィーの長い黒紫色の髪がレイラの指先に触れようとした瞬間、ふたりは光に包まれた。

まず、耳に入るのは規則正しい機械音と自分の荒い息遣い。こんなにも走ったのは初めてなんじゃないかというぐらいに自分の体に疲労感が広がるのを感じながらシルフィーは隣にいる少年を眺めた。隣にいる薄いクリーム色の髪と透き通るような青い瞳を宿した少年もシルフィーとあまり大差ない状態だった。

「大丈夫？」

とりあえず、確認とでも言うかのようにシルフィーは質問した。

「もちろん。まだけがもしてないよ。」

と、ヘルゼーからの元気の良い返事が返ってきたのとほぼ同時に一人の兵士が牢獄から現れた。

「ほう、この牢獄から簡単に抜け出したか。流石と言うべきかなんと言つか。」

明らかにこの町のほかの兵士とは違う雰囲気を纏う彼に、シルフィーは警戒心を強めた。

「あなたは？」

「もちろんこの町の単なる兵士ですよ御立派な魔道士さん。」

そついい終わるか終わらないかの刹那、兵士は突然剣を抜きヘルゼー

ーに襲い掛かった。否。かかるうとしたがシルフィーにより阻まれた。

「止まれ!!」

シルフィーの指の先から出た白い光によってその兵士はまるで石像のように動かなくなった。

「いったいどういうこと?!」

わけがわからないといった様子のヘルゼーがシルフィーにたずねたところ答えは意外なところから返ってきた。

「当然……かな。ヘルゼー、表向きの支配者が一番強いとは限らないって事をよく頭に入れといて。もちろん本当に一番強い場合もあるけどこの町は違ったみたいよ。」

シルフィーが言い終わる前に先ほどの兵士と似たような雰囲気をもし出している兵士が、5人ほど現れた。

と、そこに先ほどまで牢獄の中にいたレイラが姿を現し先ほどの口調と同じように兵士に命じた。

「もう、終わったんだ。これ以上追いかける必要は無い。逃がしてやれ……。」

しかし、兵士は誰一人としてレイラの命令に従い退こうとする者はいなかった。

「おい!聞いているのか?!」

レイラが5人のうちの一人の服の袖を引っ張ろうとしたそのときだった。

「この町で一番強いのは、お前じゃねーんだよ！！」

そういつて先ほど服の袖を引っ張られた男がレイラの額に中指を押し出すようにあてた。その瞬間、レイラはいとも簡単にその場に倒れて自由を失った。口からは泡を吹き、全身が激しく痙攣しているところから見て、神経にダメージを直接与えたのだろう。

「こいつら……帝国直属の部下だ！！！」

最初に声を発し身の危険を知らせたのはシルフィーだった。そして、5人の兵士たちはヘラヘラと笑いながら斧を片手に近づいてきた。

「おねえーちゃん、やっぱりあんた頭いいなあ！！！」

言うと同時に持っていた斧を振り下ろした。シルフィーは紙一重でそれをよけると、いまだ呆然として現状を把握し切れていないヘルゼーの腕をつかみ全速力で走り出した。

「逃げられねーぜ！おれたちからはさあ！！！」

レイラもなかなかの手練れだったが、こいつらとは比べ物にならない。いくら一般兵とはいえ流石直属。鍛え方がまるで違う。こんなやつらを5人も一度に相手していたら流石のシルフィーでも自分の身が危ないことは容易に理解できた。あとは、ヘルゼーを奮い立たせ自身の力で走ってもらうしかない。幸いにもシルフィーが適当に走っていた場所は、その町の出口に当たる門へと向かう道だった。

「ヘルゼー！！しっかりして！！あなたを抱え込んだままじゃ早く走れない！！」

シルフィーの声により、ヘルゼーはようやく自分のなすべきことと現状を把握した。

しかし、ヘルゼーが自分の足で走り出したのとはほぼ同時に兵士たちからの攻撃も始まった。

流石、少数精鋭といったところか。一人が魔法を使ったらしいのだがその規模の大きさが違った。それは、ゆうに町ひとつを飲み込むまほうだった。今までしっかりと地面に張り付いていた影がゆらゆらとその姿を変え、シルフィーたちの方向感覚や、平衡感覚を奪っていく。

さらに、もう一人がその揺らめく影を人型に変え、実体無き兵士を無数に作り出していた。今では自分たちの影ですら刀を持って襲ってくるかのように思えた。

「実体のない相手とは戦っても無意味。視覚に惑わされないで、今ならさつきまで走っていたのと同じ道を基本的に走っているはずだから全速力ではしりぬけるわよ！！」

シルフィーの声と共に今までにこんな速さで走ったことが無いような速度で二人は駆け抜けていた。途中何度も自分達の姿かたちをした影に襲われそうになったがすべて紙一重でかわしひたすらに走った。

そして、シルフィーの読みは正しかったとヘルゼーは痛感した。この町の出口と思われるところから白い光がぼんやりと見えた。自分達の周りが夕焼けのように赤いおかしなもやに包まれていたからこそ見つけた小さな光。そこを指差し、ヘルゼーは叫んだ。

「シルフィー！！あそこだ！！」

「何が?!」

「出口だよ!ほら!光!」

シルフィーはヘルゼーにいぶかしげな顔をしてみせたが、自分にもわかったようで、コクリとうなずくと最後の力を振り絞って走った。

第14話 闇に堕ちた街、光を愛する者々6（後書き）

更新が大変遅く更に不定期で申し訳ありません。

これからもこのような事態が予想されますが気長に待っていて頂けると大変ありがたいです。

これからも描き続けていくのでよろしくお願いします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7185a/>

---

君と湖で...

2010年12月9日05時03分発行